（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書　第35輯

近畿自動車道和歌山線建設に伴う

滑瀬遺跡 II

―― 発掘調査報告書 ――

1989

大阪府教育委員会
財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書　第35輯

近畿自動車道和歌山線建設に伴う

滑瀬遺跡 II

―― 発掘調査報告書 ――

1989

大阪府教育委員会
財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

序　　文

大阪府泉州南部に位置する泉南市内に所在する滑瀬遺跡は、風吹峠を越えて和歌山県に通じる場所に位置しています。遺跡は独立丘陵と男里川の支流の河岸段丘に広がり、弥生時代の集落跡であります。

本遺跡は、関西国際空港のアクセス道路の一つなる近畿自動車道和歌山線と府道金熊寺男里線が交わる地点に当り、特に近畿自動車道和歌山線は早期に開通が望まれているので建設に先立ち埋蔵文化財の発掘調査を実施している所であります。

調査は昭和60年度から数次にかけて行い、泉南方面では数少ない弥生時代の集落跡であることが確認されています。弥生時代の集落は、丘陵上とその斜面に竪穴住居跡が間隔を開けて建てられている。低地には建物を認めることが出来なかったが、溝その他の遺構が広がることを確認している。

今回の調査は、昭和61年12月までの２次の調査を後を受けてさらに南側の調査を行う必要が生じたの再度調査を行ったものであります。

調査の成果については、本報告書に記載されていますが、前回の調査結果と同様に丘陵斜面に弥生時代の竪穴住居跡が検出された。独立した丘陵を挟み住居跡が検出されたことは、弥生時代の集落立地を考える資料として重要なものとおもわれます。今後の研究分析に利用されることを願います。

本発掘調査を実施するにあたり、日本道路公団大阪建設局岸和田工事事務所、泉南市教育委員会、その他地元関係者の皆様と、調査を担当された（財）大阪府埋蔵文化財協会の皆様に深く感謝いたします。

これからの文化財行政に対するご理解とご援助をお願い申し上げます。

平成元年１月

大阪府教育委員会

参事兼文化財保護課長　　吉房康幸

序　　文

滑瀬遺跡は、本協会をはじめとする既往の調査により弥生時代から平安時代にかけての集落跡であり、とりわけ、「高地性集落」としての条件を備えた泉南地域では数少ない弥生時代の集落跡の様相が明らかにされました。そして、風吹峠を通じて和歌山県に通じる大阪側の喉元部を占地していることにも起因してか、より強く、紀伊文化の影響を受けていたことも、明らかにされました。

今回の調査結果については、本報告書に詳しく記述したところでありますが、先の成果とあわせると、全てが同時存在したようではないが、23棟以上の竪穴住居と数棟の掘立柱建物で構成されるかなりの規模の集落跡となり、単なる「見張り台」、「のろし台」的な性格をもった以上のことも考えられます。

本報告書が泉南地域のみならず、古代史解明の資料として、大いに利用されることを願って止みません。

最後に、調査の実施にあたり、種々ご配慮いただきました日本道路公団をはじめとする関係各位に謝意を表すると共に、特に貴重な人材を直接派遣いただいています近畿府県教育委員会、並びに大阪府下市町教育委員会に対し深謝申し上げます。

平成元年１月

財団法人　大阪府埋蔵文化財協会

理事長　浅野素雄

例　　言

1，本書は近畿自動車道和歌山線建設工事に先立つ発掘調査のうち、泉南市信達六尾地区に所在する滑瀬遺跡の第４次発掘調査の報告書である。第１～３次発掘調査に関する報告書は、すでに当協会から公刊されているので合わせて参照されたい。

2，本調査は、大阪府教育委員会および財団法人大阪府埋蔵文化財協会が、日本道路公団大阪建設局の委託を受けて実施したものである。

3，現地調査は大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと、財団法人大阪府埋蔵文化財協会調査課　第５班　技師　武内　雅人が担当した。

4，現地調査は昭和62年12月22日から昭和63年３月25日まで実施し、同年４月から整理・報告書作成の業務を開始した。

5，調査の実施にあたっては、日本道路公団岸和田工事事務所、泉南市教育委員会、および地元の諸氏の方々からは、格別の御配慮を得た。

6，本報告書の作成は武内が担当した。

凡　　例

1，本書に掲載した地図・遺構実測図の方位はすべて座標北を示している。

2，調査・本報告書で使用した地区割方法は当協会が国土座標（第Ⅵ系）を基準に独自に設定したものである。具体的には第23図に示している。

3，調査・本報告書では東京湾標準潮位によるレベル高を使用しているが、本報告書の記述では、（T.P.＋）を省略している。

4，調査・本報告書で使用した遺構番号は、第１～３次調査と関わりなく独自に１から番号を与えている。資料管理上の混乱は今回の調査を「滑瀬（その４）」と扱うことで回避している。なお、本書では竪穴住居－ＯＤ、土壙－ＯＯ、溝－ＯＳ、ピット－ＯＰ、不明遺構－ＯＸの略号を使用している。

5，本報告書中の遺構・遺物番号は、本文・実測図・写真図版とも一致する。

6，土層・土器の胎土の色調については、「新版　標準土色帖」５版　1976年（日本色研事業株式会社）の色片との比較で記載している。

7，本報告書中の遺物の数量はすべて接合前の破片数で、それには発掘作業中破砕したものも含まれている。

8，本文に記載されていない出土遺物に関する細かい情報は、遺物一覧表に記載している。なお、遺物一覧表でしめした遺物の法量のうち、土器に関するものは、総て復元ないしは残存する最大値である。

9，本書でいう甕・壺などは言うまでもなく、甕形土器・壺形土器の略称である。また、遺構の種類をあらわす溝・土壙なども、溝状遺構・土壙状遺構の略である。

本 文 目 次

序文
例言
凡例
目次
第Ⅰ章　調査の経過……1
　第1節　調査に至る経過……1
　第2節　既往の調査と第4次調査の概略……1
第Ⅱ章　遺跡の地理的・歴史的環境……3
　第1節　地理的環境……3
　第2節　歴史的環境……3
第Ⅲ章　調査の成果……7
　第1節　層序……7
　　A．基本層序……7
　　B．埋没谷の堆積状況……9
　第2節　遺構……9
　　A．竪穴住居群……9
　　B．溝状遺構……19
　　C．土壙状遺構……21
　　D．その他の遺構……22
　第3節　遺物……23
　　A．遺物包含層出土遺物……23
　　B．遺構出土遺物……26
第Ⅳ章　遺物の検討……32
　　A．出土遺物の構成と出土層位……32
　　B．弥生土器の平面的分布状況……32
　　C．弥生土器……34
第Ⅴ章　まとめ……38
遺物一覧表

挿図（表）目次

第１図　滑瀬遺跡の調査区と竪穴住居…… 2
第２図　滑瀬遺跡調査地の地形…… 2
第３図　周辺の遺跡…… 4
第４図　土層図…… 8
第５図　北部竪穴住居群断面…… 10
第６図　５ａ・５ｂ－OD実測図 …… 11
第７図　59－OD実測図 …… 12
第８図　検出遺構図…… 13・14
第９図　46－OD実測図 …… 15
第10図　91－OD実測図 …… 16
第11図　11－OD実測図 …… 17
第12図　47－OD実測図 …… 18
第13図　10－OS土層図 …… 19
第14図　40－OO、43・54・57－OS土層図 …… 20
第15図　32－OO、58－OX土層図 …… 21
第16図　33－OX土層図 …… 22
第17図　遺物包含層出土石器…… 24
第18図　遺物包含層出土土器…… 25
第19図　竪穴住居出土土器…… 27
第20図　46・59－OD出土叩き石 …… 28
第21図　33－OX出土土器 …… 29
第22図　33－OX出土土器 …… 30
第23図　弥生土器地区別出土数量…… 33
第１表　遺物の構成…… 34

図 版 目 次

図版一　上　調査前の状況（南から・右が「ナメクジ山」）

　　下　同上　　（「ナメクジ山」側から）

図版二　　遺跡遠景（空中写真・北東から）

図版三　　調査区全景（空中写真・北から）

図版四　　調査区全景（垂直写真・右が北）

図版五　　調査区全景（東側「ナメクジ山」から）

図版六　1．南東壁土層　2．F－F’土層　3．A－A’下部の土層

　　4．G－G’土層　5．B－1　土層

図版七　上　北部竪穴住居群（北から）

　　下　同上　　（東から）

図版八　1．5a・5b－OD（北から）　2．同上（南東から）　3．同上　土層

図版九　1．59－OD（東から）　2．同上　土層　3．同上　遺物出土状況

図版十　上　46－OD（南から）

　　下　同上　土層

図版十一　上　91－OD（南から）

　　下　同上　土層

図版十二　1．東部住居住居群（東から）　2．11－OD（南から）

　　3．47－OD（北から）

図版十三　1．10－OS　A－1土層　2．10－OS　C－C’・D－D’土層

　　3．7－OS　土層

図版十四　上　下部溝状遺構群（北から）

　　下　同上と40－OO（北から）

図版十五　1．49－OS（北から）　2．32－OO（南から）

　　3．34－OD（北から）　4．32－OO北方ピット群（西から）

図版十六　1．43・54・57－OS　土層　2．58－OX（東から）

　　3．40－OO　土層（北から）

図版十七　1．33－OX（南から）　2．同上A－2　土層

　　3．同上　遺物出土状況（北から）

図版十八～二十二　出土遺物

第Ⅰ章　調査の経過

第1節　調査に至る経過

滑瀬遺跡は泉南市信達六尾に所在し、かねてから奈良時代を中心とした複合遺跡として周知されていた。そこに近畿自動車道和歌山線の路線が企画されたため、まず、1985年に路線予定地内の平野部に試掘調査が実施された。その結果、弥生時代を中心とする遺跡であることが判明し、1985年～1986年にかけて平野部の本調査が実施された。

次いで、1986年には通称「ナメクジ山」と呼ばれる独立丘陵部を対象とした試掘調査が行なわれ、丘陵上にも遺構の存在することが判明したため、同年中に本調査が実施されることとなった。

以上が滑瀬遺跡の第1～3次の発掘調査である。これらの調査の結果、「ナメクジ山」の西側の丘陵上にも遺跡が広がることが予想されるに至り、関係諸機関のあいだで当該地の取り扱いを巡って協議がなされることとなった。ところが、当該地の一部が水源灌養林に指定されていたため、調査の着手に遅滞をきたし、その間に調査対象地の一部が工事により失われる事態が生じてしまった。調査が実施されたのは1987年12月～1988年3月にかけてである。これが今回報告する分の調査で、滑瀬遺跡の第4次調査にあたる。

第2節　既往の調査と第4次調査の概略　第1・2図　図版二～五

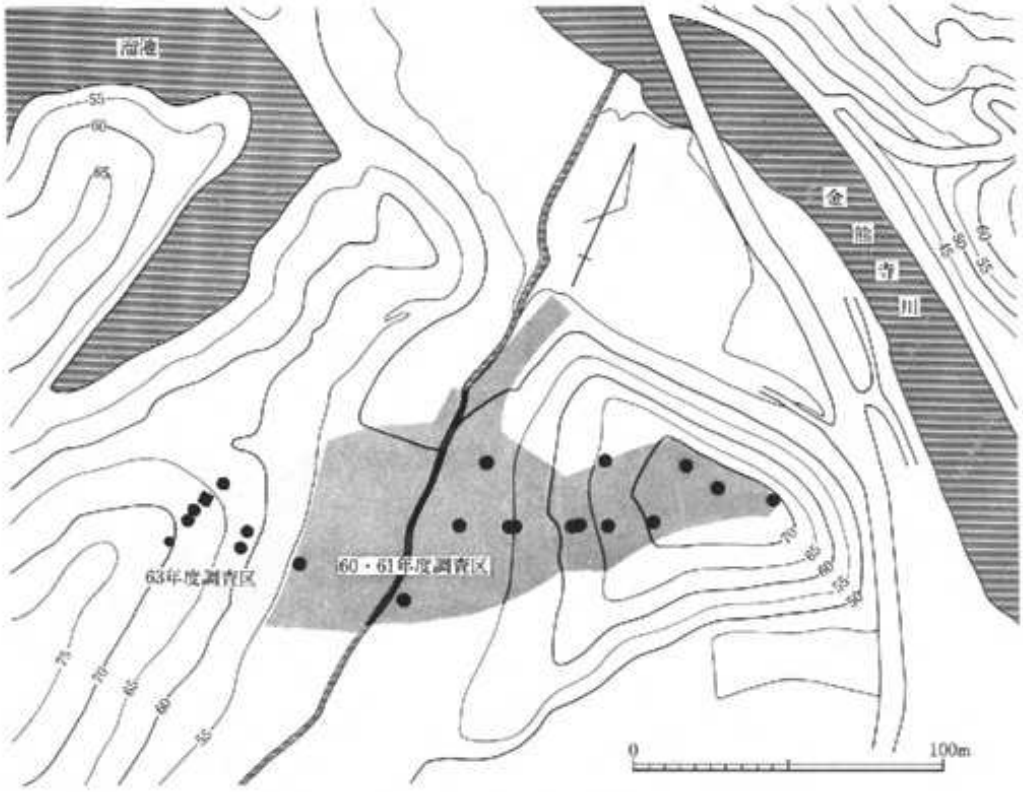
第1～3次調査の成果については、既に報告書が公刊されているので詳細についてはそれに譲り、ここでは概略を記す。

過去3回にわたる調査では、弥生時代～近世にかけての様々な遺構が検出されたが、弥生時代の遺構が遺跡の中心をなすといえる。弥生時代中期末～後期初頭に比定される竪穴住居15棟と数棟の掘立柱建物が検出されているが、これらは主として「ナメクジ山」の頂上部から西側斜面にかけて展開しており、平野部で検出された当該時期の自然流路の西側では、わずか1棟の竪穴住居が検出されただけであった。

また、独立丘陵「ナメクジ山」は、和歌山県の紀ノ川流域に通じる根来街道を見下ろす交通の要衝といえる位置にある。戦乱の時期にはこの地の戦略的価値は一層高いものであったろう。第3次発掘調査ではこの丘陵の頂上近くの斜面で、出土遺物から14世紀後半～15

世紀前半のものと推定される幅５ｍを測る堀状の遺構が検出されている。

今回の第４次調査でも、過去の調査成果と近似した内容の遺構を検出した。遺存状況は不良であったが、弥生時代後期初頭のものと判断される竪穴住居は、やや不確かなものも含めると計８棟検出され、過去の調査例と合わせると滑瀬遺跡は合計23棟以上の竪穴住居群で構成される集落跡であることが判明した。また、中世の瓦を出土した幅1.6m程の規模の溝状遺構が、丘陵の上部斜面を巡ることが今回の調査でも確認されている。この遺構の年代の詳細は不明であるが、「ナメクジ山」検出の堀状遺構との関連が考慮されて然るべき遺構である。



第１図　滑瀬遺跡の調査区と竪穴住居

第２図　滑瀬遺跡調査地の地形（基盤層）Ｓ＝1/2000

第II章　遺跡の地理的・歴史的環境

第1節　地理的環境　図版一～三

泉南地域の地形は、和泉山脈から派生した丘陵や段丘状地形が大部分を占め、大河川が無いため、沖積平野部は殆ど見られない。滑瀬遺跡の所在する大阪府泉南市でも、沖積平野は市域の南北を劃する樫井川・男里川の河口部に、僅かに見られるだけである。

滑瀬遺跡は、和泉山脈近くの丘陵地帯に立地しており、現在の海岸線からは4㎞あまり離れている。遺跡付近には金熊寺川の形成した狭い河岸段丘があるだけで、水田耕作にはあまり適したところはない。

遺跡は、標高約70mを測る独立丘陵である通称「ナメクジ山」と、その西側にある標高約75mの丘陵、およびこの二つの丘陵に挟まれた狭小な平野部に展開する。平野部の標高は50m程である。遺跡の立地する丘陵上からの眺望はすこぶる良く、空気の澄んだ晴れた日には遠く淡路・六甲が望めるほどである。

第2節　歴史的環境　第3図

滑瀬遺跡の付近一帯の地域は、近年まで大規模な開発があまりおこなわれず、その結果、考古学的な知見も多いとは言えない。以下、弥生時代の遺跡を中心に当遺跡周辺の歴史的景観について簡単にふれる。

旧石器時代～縄文時代前期までの遺跡は、旧石器時代後期のナイフ形石器を出土した当遺跡を含め、丘陵上に立地するいくつかの遺跡が知られているが、断片的な資料の出土に留まり、今のところ詳細は不明である。縄文時代後期・晩期になると樫井川右岸の段丘上に三軒屋遺跡や船岡山遺跡が、男里川右岸の段丘上には男里遺跡が出現する。弥生時代前期の遺跡も今のところあまり知られておらず、男里遺跡や三軒屋遺跡・船岡山遺跡で前期後葉の土器が出土しているだけである。

中期になると遺跡の数は増加し、中期中葉の遺跡としては樫井川流域では道池・三軒屋・夫婦池遺跡、男里川流域では男里遺跡が知られており、このうち、三軒屋遺跡では竪穴住居や土器棺・木棺墓などが見つかっている。中期後葉では段丘上に立地する遺跡としては幡代遺跡や方形周溝墓の見つかった樫井西遺跡があるが、これらよりややおくれて丘陵上

1．滑瀬遺跡
2．林昌寺跡
3．林昌寺銅鐸出土地
4．前田池遺跡
5．雨山南遺跡
6．雨山遺跡
7．高田山古墳群
8．幡代遺跡
9．平野寺跡
10．光平寺跡
11．男里遺跡
12．天神ノ森遺跡
13．玉田山遺跡
14．玉田山古墳群
15．寺田山遺跡
16．岩崎山遺跡
17．石田山遺跡
18．三軒屋遺跡
19．松原遺跡
20．船岡山遺跡Ａ地点
21．船岡山南遺跡
22．夫婦池遺跡
23．道池遺跡
24．新家オドリ山東遺跡
25．新家オドリ山遺跡
26．新家オドリ山南遺跡
27．一丘神社遺跡
28．向井山遺跡
29．孤池遺跡
30．樫井南遺跡

第３図　周辺の遺跡

に立地する遺跡が出現してくるようになる。新家オドリ山・向井山・オドリ山東・オドリ山南・孤池遺跡、そして当遺跡である。このうち、新家オドリ山遺跡では中期後葉～後期にかけての竪穴住居が十数棟みつかっており、向井山遺跡では中期後葉の方形周溝墓が確認されている。このほか弥生時代中期の遺跡としては、偏平鈕式袈裟襷文銅鐸を出土した林昌寺銅鐸出土地がある。

後期になると遺跡は再び段丘上に立地するようになり、船岡山・船岡山南・夫婦池・男里遺跡などが知られている。

弥生時代につづく古墳時代前期では、男里・湊遺跡などの製塩土器を出土する遺跡の他、三軒屋遺跡・船岡山遺跡などが確認されているだけである。

註１）男里遺跡の最近の成果である縄文晩期・弥生時代前期に関する情報は、泉南市教育委員会　仮屋　喜一郎氏の教示を得た。

註２）当協会技師　冨加見　泰彦氏の教示を得た。

参考文献

三軒屋遺跡

「三軒屋遺跡」泉佐野市教育委員会　1972

「三軒屋遺跡－昭和54年度の調査」泉佐野市教育委員会　1980

「泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要　II」泉佐野市教育委員会　1982

「泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要　V」泉佐野市教育委員会　1985

「泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要　VII」泉佐野市教育委員会　1987

「泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要　VIII」泉佐野市教育委員会　1988

船岡山遺跡

「船岡山－Ｂ地点発掘調査報告書　84－３区の調査」泉佐野市教育委員会　1985

男里遺跡

「男里遺跡発掘調査報告書」（泉南市文化財調査報告書　第二集）泉南市教育委員会　1978

「男里遺跡発掘調査報告書　II」（泉南市文化財調査報告書　第三集）泉南市教育委員会　1982

「男里遺跡発掘調査報告書　III」（泉南市文化財調査報告書　第四集）泉南市教育委員会　1982

樫井西遺跡

「泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要　VI」泉佐野市教育委員会　1986

向井山遺跡

「泉南市向井山遺跡発掘調査報告書」泉南市教育委員会　1972

湊遺跡

「泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要　IV」泉佐野市教育委員会　1984

なお、上記以外の遺跡については「泉南市史」史料編　泉南市史編纂委員会　1987・「大阪府史」第1巻　大阪府編集専門委員会　1979　に依っている。

第Ⅲ章　調査の成果

第１節　層序

Ａ．基本層序　第４・８図　図版六

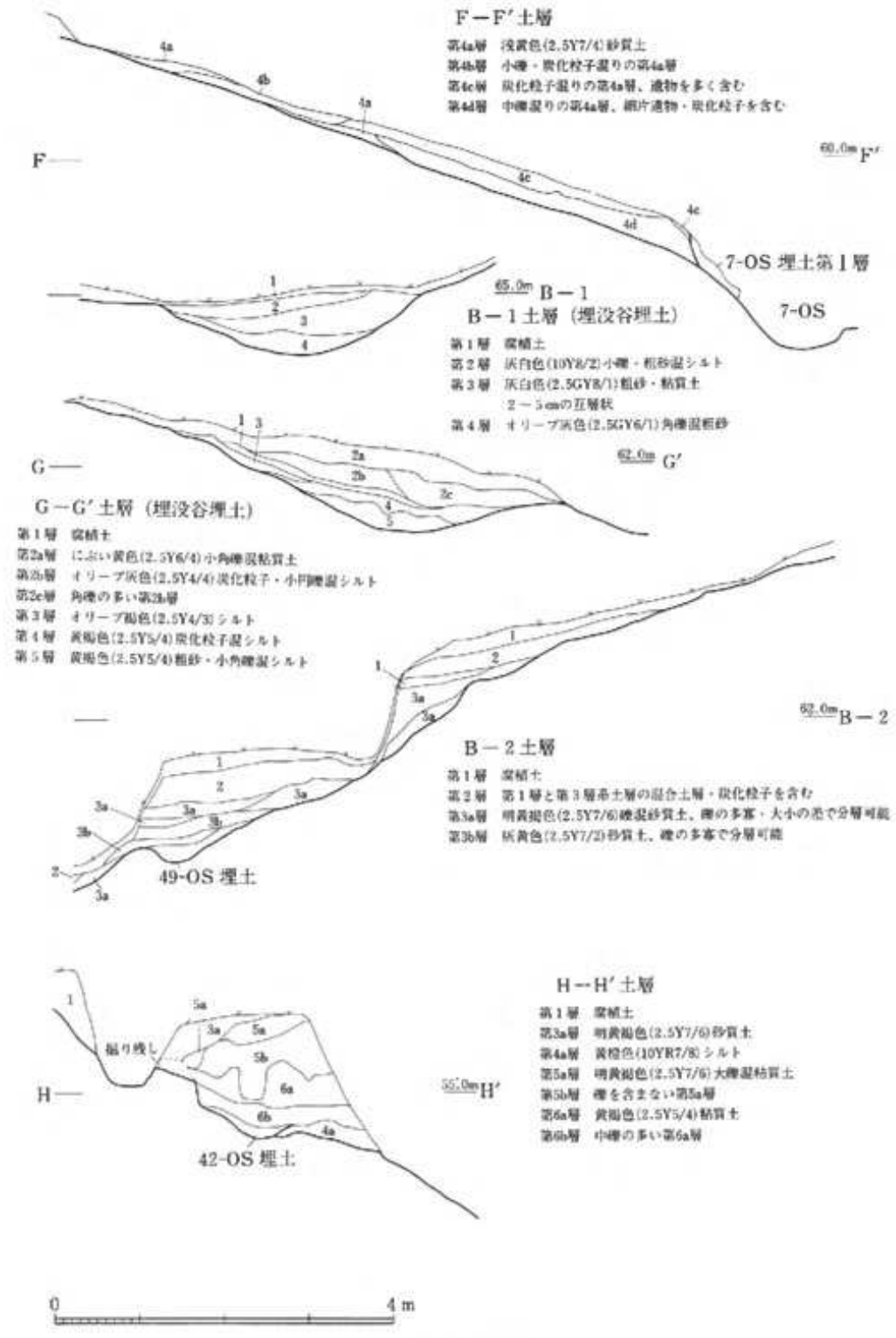
今回の調査対象地は平均斜度が約30度にも達する丘陵斜面上のため、土砂の流失・堆積が著しく、概ね標高68mより上部では表土直下が岩盤ないしは黄褐色土系の基盤層となっている。丘陵中腹から下部にかけては頻繁な土砂の堆積作用が観察されるが、人為的なものも含め、再流失・再堆積が繰り返されたためか、特に下部では不整合な堆積状況を呈している部分がある。なお、第４・13～16図の土層断面の平面位置は第８図に示している。

標高59m～65mにかけての部分は、戦時中から戦後しばらくの間、畑地として利用されたため、４～５段にわたる狭小な段状の地形が形成されていた。第２層は畑地開墾のおり、上部の丘陵を削平・整地したものと判断される土層で、段状地形の部分以外に北側の小開析谷の埋土上部にも観察される（第４図Ｂ－１土層　第２ａ～２ｃ層）。第２層は、基盤層や弥生土器片を含む黄褐色土のブロック状塊と腐植土の混合土で、炭片が多量に含まれており、洋釘が多数出土している。

第３層は明黄褐色ないしは黄色系の小礫混じり砂質土層で、炭化粒子の有無や礫の大小・多寡により幾層かに分層される。弥生土器片を少数包含するが、中世の溝10－OS埋没後に堆積している状況が観察され、近世以降の流失・堆積土である公算が強いと判断される。

第４層は浅黄色を呈するシルト層土で、弥生土器片を多量に包含しており、包含される小礫・炭化物・弥生土器片の多寡で四層に細分される。丘陵下部にも認められるが、おもには40－OD以北の部分で顕著に観察される。この部分の第４層は、中世の溝７－OSのベース層をなしていることが観察される（第４図Ｆ－Ｆ’土層）ので、本遺跡の遺構・遺物の検出状況を勘案すれば、プライマリーな弥生時代の遺物包含層である公算が大と言える。

第５層は明黄褐色粘質土で、大礫を多く含むか否かで二層に分層され、主として、丘陵下部に掘削された現用水路の東側にある土手状の部分で観察される。第６層も丘陵下部にだけ観察される土層で、黄褐色系の色調を呈する粘質土であるが、包含される礫の有無・多寡で三層に分層される。第５・６層は遺物を包含していないが、黒色土器の細片を出土


F－F′土層
第4a層　浅黄色(2.5Y7/4)砂質土
第4b層　小礫・炭化粒子混りの第4a層
第4c層　炭化粒子混りの第4a層、遺物を多く含む
第4d層　中礫混りの第4a層、網片遺物・炭化粒子を含む
F
F′
7-OS 埋土第1層
7-OS
B－1
B－1土層（埋没谷埋土）
第1層　腐植土
第2層　灰白色(10Y8/2)小礫・粗砂混シルト
第3層　灰白色(2.5GY8/1)粗砂・粘質土
2－5cmの互層状
第4層　オリーブ灰色(2.5GY6/1)角礫混粗砂
G
G′
G－G′土層（埋没谷埋土）
第1層　腐植土
第2a層　にぶい黄色(2.5Y6/4)小角礫混粘質土
第2b層　オリーブ灰色(2.5Y4/4)炭化粒子・小円礫混シルト
第2c層　角礫の多い第2a層
第3層　オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト
第4層　黄褐色(2.5Y5/4)炭化粒子混シルト
第5層　黄褐色(2.5Y5/4)粗砂・小角礫混シルト
B－2
B－2土層
第1層　腐植土
第2層　第1層と第3層希土層の混合土層・炭化粒子を含む
第3a層　明黄褐色(2.5Y7/6)礫混砂質土、礫の多寡・大小の差で分層可能
第3b層　灰黄色(2.5Y7/2)砂質土、礫の多寡で分層可能
49-OS 埋土
H
H′
H－H′土層
第1層　腐植土
第3a層　明黄褐色(2.5Y7/6)砂質土
第4a層　黄橙色(10YR7/8)シルト
第5a層　明黄褐色(2.5Y7/6)大礫混粘質土
第5b層　礫を含まない第5a層
第6a層　黄褐色(2.5Y5/4)粘質土
第6b層　中礫の多い第6a層
掘り残し
42-OS 埋土
0
4 m

第4図　土層図

した42－OSの上部に堆積することから、中世以降の堆積作用の所産と判断される。

基本的な層序は凡そ以上の如くである。このうち遺構面を構成するのは、おもには岩盤・基盤層であるが、丘陵下部では第４層が溝状遺構のベース層となっている部分もある。次に、現状では埋没していた小規模な開析谷の堆積状況についてふれる。

Ｂ．埋没谷の堆積状況　第８・48図　図版四・六

調査地の南北二箇所で、埋没した小規模な開析谷が検出された。

北側の埋没谷（第４図Ｇ－Ｇ'）は、長さ15m以上・幅約６ｍ・深さ約0.8m程の規模を測り、北東方向に延びる。表土（第１層）および畑作の為の整地土（第２ａ～ｃ層）下に、畑地開墾以前の表土層が観察でき、最下層には粗砂・角礫が堆積していた。第２層からは近代の遺物が少数出土しているが、最下層からはスクレイパーが２点出土しただけで土器類の出土は見られなかった。

南側の埋没谷（第４図Ｂ－１土層）

長さ16m以上・幅約７ｍ・深さ約0.8mを測り、南東方向に延びる。最下層に粗砂・角礫の堆積が認められる点は北側の埋没谷と同様であるが、上部に２～５㎝の厚さの粗砂と粘質土が交互堆積している点は異なっている。この埋没谷の埋土からは遺物はなにも検出されなかった。

何れの埋没谷も、中世の溝である７・10－OSをその開析作用により寸断していることから、中世以降に形成されたものといえる。

第２節　遺構

Ａ．竪穴住居群　第５・８図　図版二～五

合計七棟の竪穴住居が検出された。平面的位置関係からこれらの竪穴住居は、調査区北側の五棟と、調査区東側の二棟の二群に分れる。いずれも遺存状態は悪く、壁や壁溝・柱穴の一部が検出されただけで、全容の分かる例はなく出土遺物にも乏しい。

北部竪穴住居群　第５・８図　図版七

標高63m～71mを測る東南向き斜面に五棟が階段状に配置されており、うち二棟は重複している。

５ａ・５ｂ－OD　第６図　図版八

畑地に利用されていた標高約63mを測る小規模な平坦地で検出され、一部は調査区域外

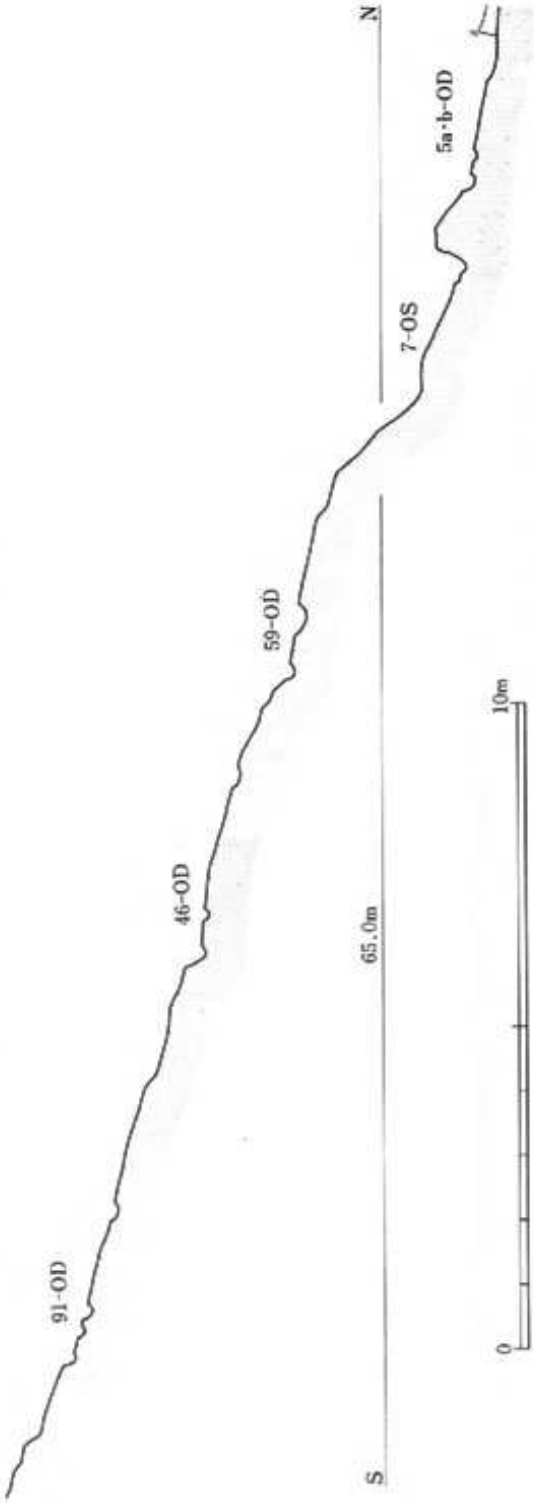
に延びる。二棟が同じ位置に重複して造られており、旧竪穴住居を５ｂ－OD、新竪穴住居を５ａ－ODと称することにする。旧竪穴住居の埋土にブロック状の基盤層が多く含まれていたことから、旧竪穴住居を埋め立てて、同心円的に平面規模の拡張を企てたものと判断される。

５ａ－OD

遺存した壁溝から判断すると、径６ｍ～８ｍ程の円形プランを呈するものと思われる。５ｂ－ODの壁溝に重複して掘削されたピットが本竪穴住居の柱穴に相当すると考えられ、これらのピットの配置から判断すると、副柱穴を持つ六本柱構造である公算が大といえる。なお、壁溝に接して比高差約25㎝を測る段差が調査前の状況でも観察されたが、この段差が後世の削平によるものか、竪穴住居の壁が一部遺存していたものかは詳らかではない。

壁溝は幅約30㎝・深さ約10㎝・柱穴は径約10㎝～16㎝・深さ約５㎝～25㎝を各々測る。

弥生土器176片が出土しているが、何れも埋土第２層からで、底面直上から出土したものはない。



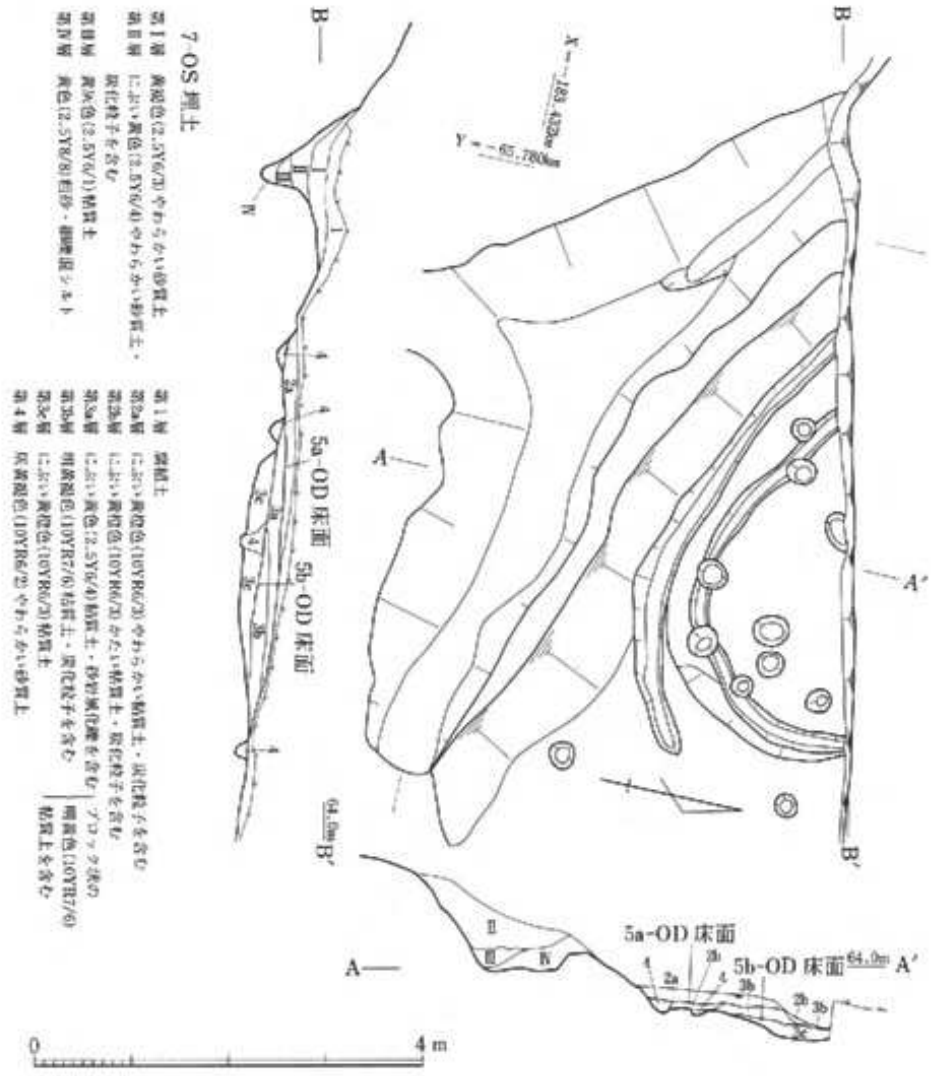
第５図　北部竪穴住居群断面（ポイントの平面位置は第８図に示している）

5 b－OD

遺存した壁溝から判断すると、径4 m程の円形プランを呈するものと思われる。本竪穴住居に伴うと考えられるピットが四箇所で検出されており、その配置から判断すると副柱穴を持つ五本柱構造である公算が大といえる。なお、土層観察の結果、本竪穴住居をつくるにあたり、竪穴住居の中心近くを埋め立てて床面を構成したことが判明している。

壁溝は幅約22cm・深さ約10cm、柱穴は径22cm～38cm・深さ約6 cm～15cmを各々測る。

埋土から弥生土器が4片出土しているが、何れも小破片で図化できるものは少ない。



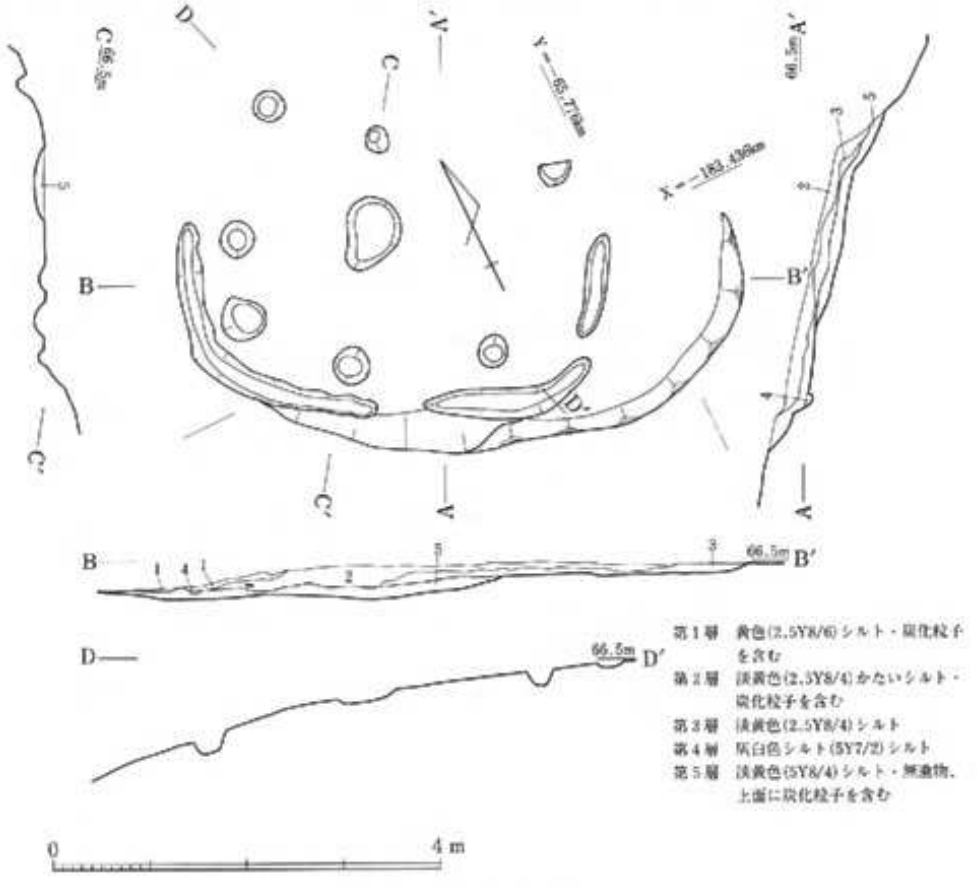
第6図　5 a・5 b－OD実測図

59－OD　第７図　図版九

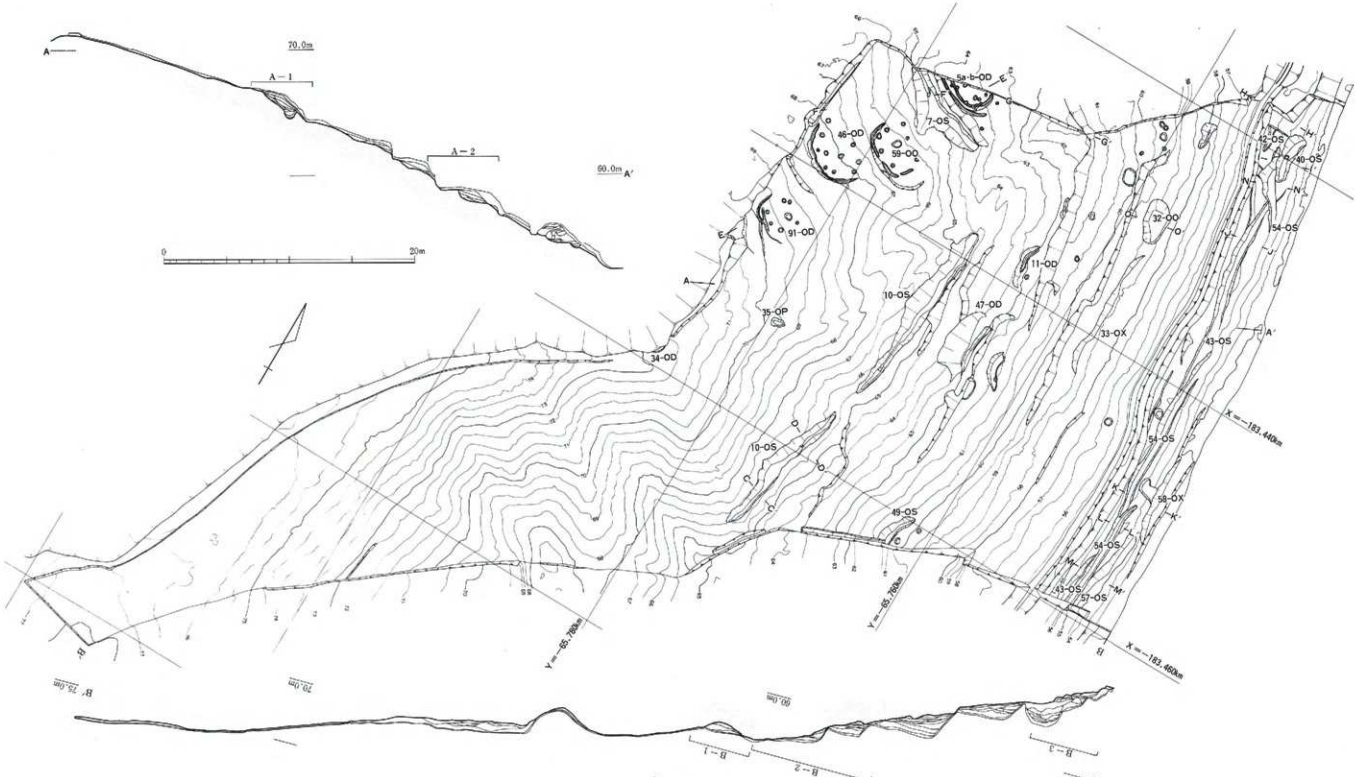
標高約66.5m地点で検出された。遺存した壁溝と七箇所のピットの配置から判断すると、方約4.5mの隅丸方形プランを呈するものと思われ、中央に炉跡とおぼしきピットがある。南側の壁の一部が遺存しており、その高さは約40cmを測る。壁溝の幅は約30cm・深さ約３cm、柱穴は径約30cm～40cm・深さ約７cm～20cmをそれぞれ測る。炉跡に相当する位置にあるピットは55cm×75cm程の長円形で深さ約15cmの規模であるが、炭・灰の堆積や焼土化した部分も観察されなかった。

壁溝が断続的にしか遺存していないので床面の一部も流失したものと思われるが、丘陵の斜面に則して柱穴の底面のレベルが下がっている点から判断すると、本来の床面もある程度傾斜していた公算が大といえる。

埋土から弥生土器521片、叩き石１点が出土しているが、底面に密着した状態のものは少ない。また、東南隅のピットから弥生土器１片が出土している。



第７図　59－ＯＤ実測図


70.0m
A－1
A－2
60.0m
A'
0
20m
A
5a-b-OD
7-OS
46-OD
59-OD
91-OD
35-OP
34-OD
10-OS
47-OD
11-OD
33-OX
32-OD
42-OS
40-OS
54-OS
43-OS
A'
X=-183.440m
54-OS
58-OX
49-OS
54-OS
43-OS
57-OS
Y=-85.760m
Y=-85.760m
X=-183.460m
B
B'
75.0m
70.0m
60.0m
B－1
B－2
B－3

第 8 図　検出遺構図

46－OD　第９図　図版十

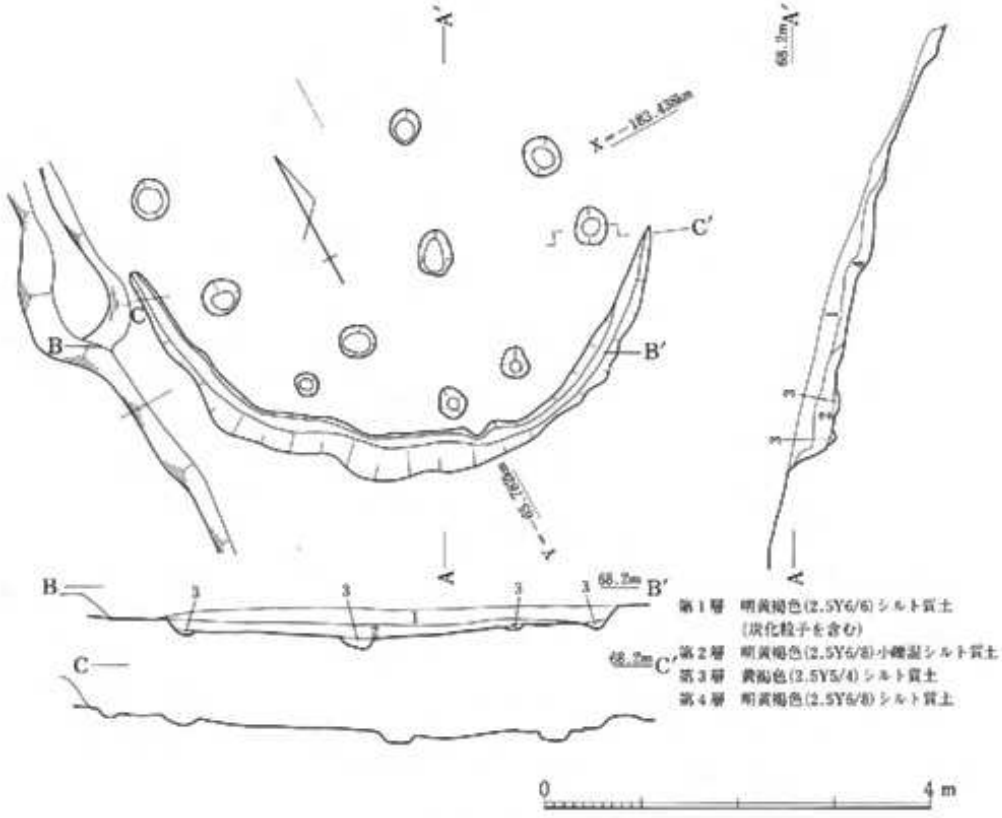
標高約68mの地点で検出され、壁・壁溝の一部が遺存していた。遺存していた壁溝から判断すると、径約６ｍの円形プランを呈するものと思われる。九箇所でピットが検出されており、そのうち竪穴住居の中央部に位置するピットは炉跡に相当するものと考えられる。残りのピットの配置から考えると、本住居跡は八～十本柱の構造であったものと判断される。

遺存する壁の高さは約40cm、壁溝は幅約20cm・深さ約８cm、ピットは径約25cm～42cm・深さ約10cm～18cmをそれぞれ測る。炉跡に相当するピットは径34cm×46cm・深さ約18cmの規模であるが、炭・灰の堆積や焼土化した部分は観察されなかった。

埋土第２層から弥生土器307片、叩き石１点が出土している。

91－OD　第10図　図版十一

標高約70mの地点で検出され、壁・壁溝の一部が遺存していた。遺存していた壁溝から



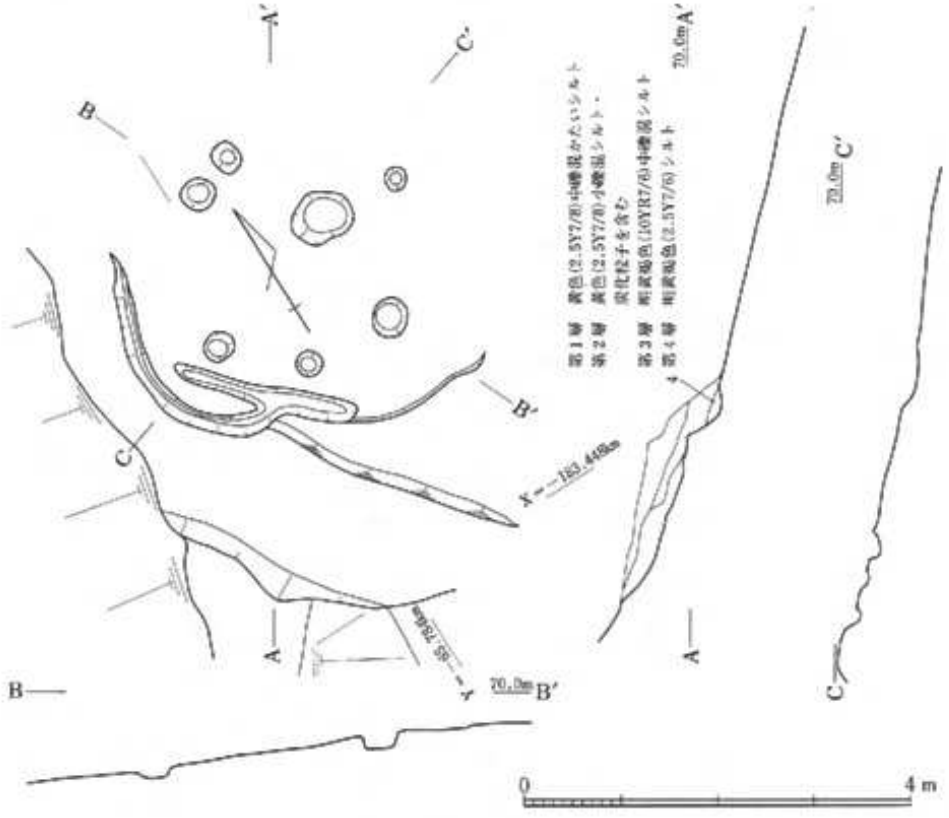
第９図　46－ＯＤ実測図

判断すると、径4.5m～5mほどの円形プランを呈するものと思われる。七箇所でピットが検出されており、そのうち竪穴住居の中央部に位置するピットは炉跡に相当するものと考えられる。残りのピットの配置から考えると、本竪穴住居は五～六本柱の構造であったと判断される。

遺存した壁の高さは約18m、壁溝は幅約18m・深さ約12m、ピットは径26cm～36cm・深さ6cm～19cmをそれぞれ測る。炉跡に相当するピットは径54cm×62cm・深さ約16cmの規模であるが、炭・灰の堆積や焼土化した部分は観察されなかった。

ピットや壁溝の遺存状況から考えると、床面の一部も失われているものと言えるが、柱穴と考えられるピットの底面のレベルが丘陵の傾斜に則して低くなっている点から判断すると、本来の床面もある程度の傾斜面であった公算が大といえる。

なお、本竪穴住居の約2m西南に、基盤層を掘削した比高差約36.5cmの段が認められるが、過去の滑瀬遺跡の調査例から判断すると、本竪穴住居構築に伴う「地山整形痕」と考えられる。



第10図　91－ＯＤ実測図

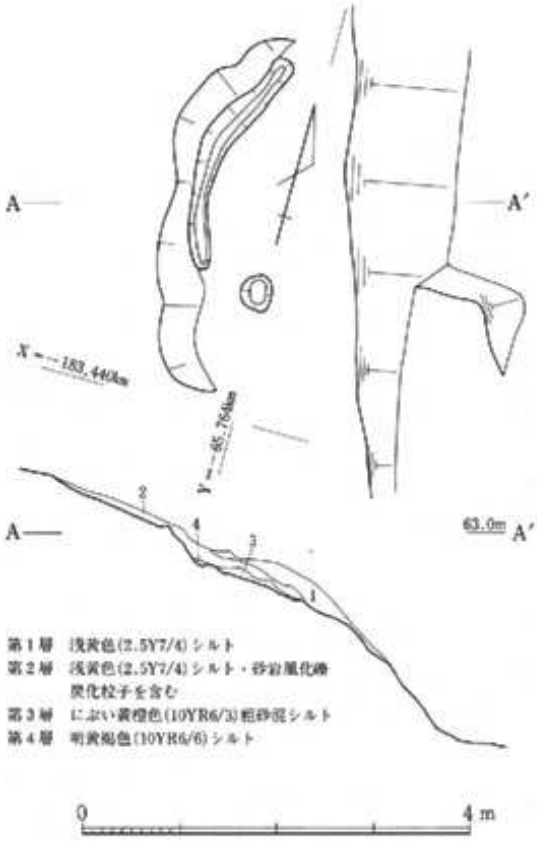
遺物の出土は皆無である。

東部竪穴住居群　第８・11・12図　図版十二

標高約63mの東向き斜面で等高線に平行するように二棟の竪穴住居が検出されている。開墾による掘削を受けたため、遺存状況は極めて悪く、壁および壁溝・ピットの一部が遺存しているだけである。

11－OD　第11図　図版十二

壁・壁溝の一部が円弧状に遺存しており、ピットが一箇所で検出された。壁の高さは約40cm、壁溝は幅約30cm・深さ約７cm、ピットは径約32cm・深さ約７cmをそれぞれ測る。遺存した壁・壁溝から判断すると、径約５mの円形プランを呈するものと思われる。



第11図　11－ＯＤ実測図

埋土第２層から弥生土器60片が出土しているが、何れも細片で図化できるものはない。

47－OD　第12図　図版十二

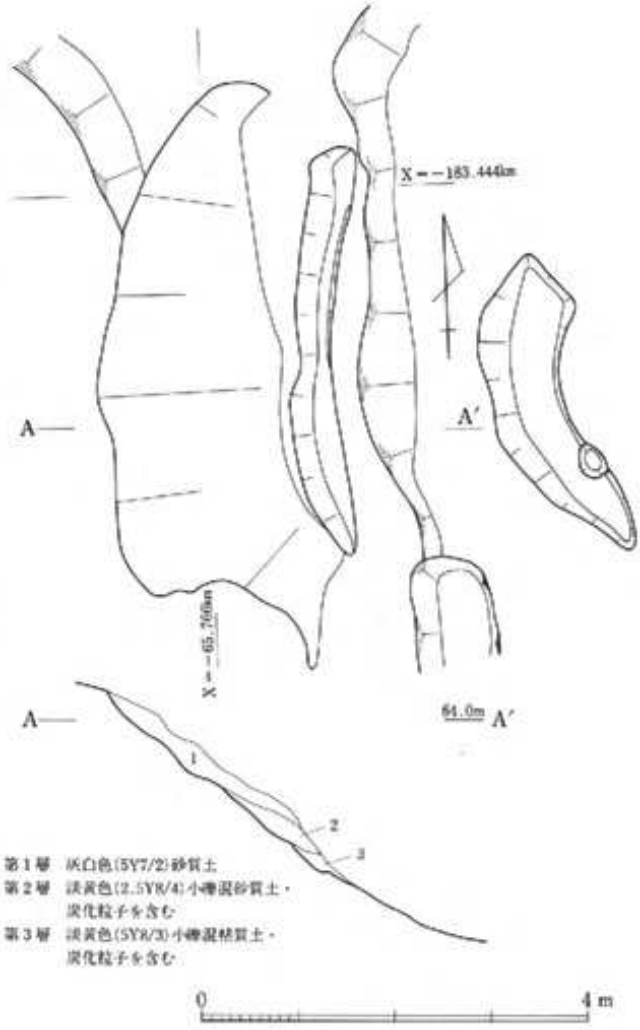
丘陵斜面の高い側に設けた「地山整形痕」と、幅約40cm・深さ約９cmを測る壁溝が、長さ約4.2mにわたり検出されただけである。

遺存した壁溝が直線的であることから判断すると、本竪穴住居は隅丸方形プランであった可能性がある。なお、壁溝から約2.4m東に離れたところで径約30cm・深さ約５cmを測るピットが検出されているが、壁溝との高低差から判断すると、本竪穴住居の柱穴とは認定し難い。このピットの埋土には炭化物が多く含まれていた。竪穴住居の埋土から弥生土器が14

5片出土している。

以上のほか、竪穴住居の可能性のある遺構として、91－ODから西南に約12m離れた地点で検出された34－OD（第8図・図版十五）がある。34－ODは深さ約5㎝・長さ約1.1mの規模を測る円弧状を呈する遺構で、遺物の出土は皆無であったが、形態から見て竪穴住居のごく一部が工事による破壊を免れたものである公算が強い。検出面の標高は約72mを測る。

以上の如く、今回検出した竪穴住居の遺存状況は極めて不良である。先にも触れたように、壁溝や柱穴の遺存状況から判断すると本来の床面も相当の規模で流失していることが推察される。したがって、壁溝や柱穴の検出面は遺存した底面にすぎず、そこに密着した状態の遺物といえども、ただちにその竪穴住居の時期を示すものとは限らない。むしろ、上部に位置する竪穴住居の遺物が、その壁や床面の一部とともに流入した公算が大といえる。同一個体と思われる器台の破片が二棟の竪穴住居から出土したり、北部竪穴住居群の最高所に位置する91－ODから1片の遺物も検出されなかったのは、このような事情に起因するものと考えられる。そして、かくも流失が著しいのは、本来の床面や壁がすべて堅い基盤層面で構成されていたのではなく、斜面の下部側では上部側をカットしたおりの土砂を整地して、竪穴住居の造作をしたためではないかと推察される。



第12図　47－OD実測図

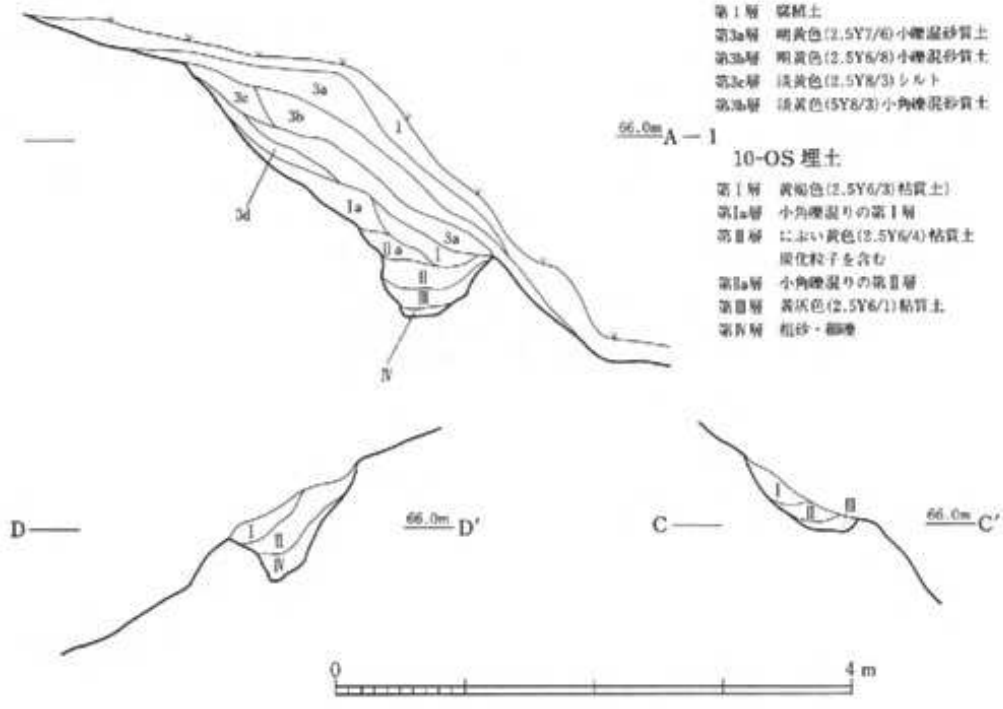
B．溝状遺構

合計８条の溝状遺構が検出されたが、その多くは東側斜面の裾近くに集中している。すべて、等高線に平行する方向に掘削されており、集排水機能を持つものと思われる。

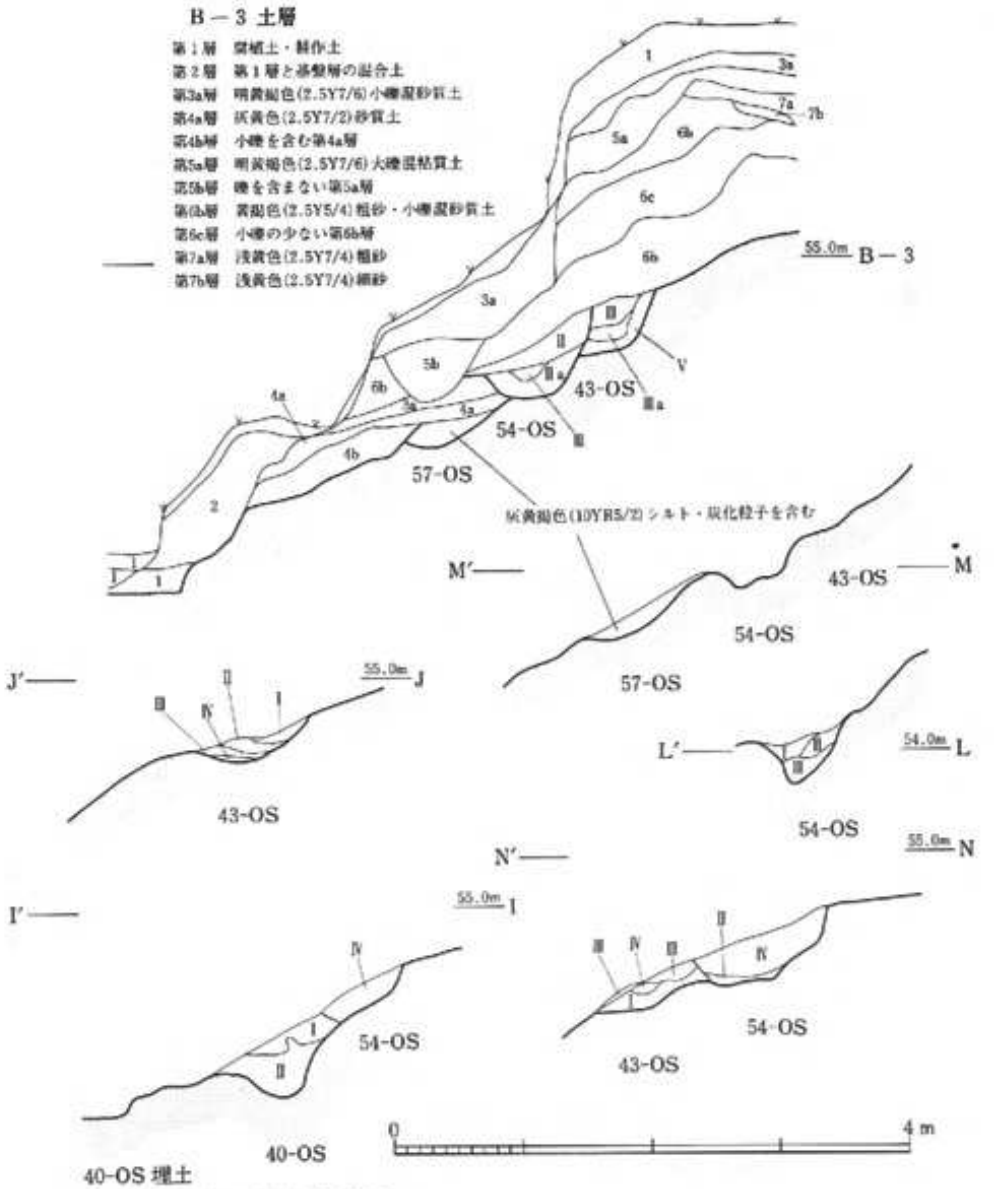
７・10－OS　第13図　図版十三

標高66m～64mを測る調査区の東側斜面から北側斜面にかけて、長さ約45mにわたって断続的に検出された。位置関係・埋土の類似性から同一遺構と判断される。最大幅約1.7m・深さ約1.6mを測り、断面形は「U」字状をなす。

何箇所かの断面観察の所見はほぼ一定しており、底面には鉄分が薄く沈着し、有機質に富む第Ⅲ層が厚さ約18cmにわたり堆積した後、周辺の基盤層に近似した第Ⅱ層系の土層で埋没していることが観察される。以上の事から本遺構は集排水機能をもつもので、機能喪失後短期間で、周辺の土が一気に流入して埋没したものと判断される。また、本遺構が三箇所で寸断されていることから、埋没後の丘陵全体の土砂の流失も著しかったことが窺われる。検出した範囲では南端と北端の底面のレベル差は約2.6mを測り、北流する溝と判断される。



第13図　10－ＯＳ土層図



40-OS 埋土

第1層 にぶい黄色(2.5Y6/4)小礫混り砂質土
第2層 紫灰色(5P6/1)角礫混り粘質土・炭化粒子を含む

43-OS 埋土

第1層 小礫・粗砂
第2層 灰白色(5Y7/2)細砂
第3層 浅黄色(2.5Y7/4)砂質土
第3a層 炭化粒子を含む第3層
第4層 浅黄色(2.5Y7/4)粗砂
第5層 暗灰黄色(2.5Y5/2)粘質土・炭化粒子を含む

54-OS 埋土

第1層 にぶい黄褐色(10YR5/4)粗砂
第2層 黄褐色(10YR5/6)シルト
第2a層 炭化粒子を含む第2層
第3層 明黄褐色(10YR6/6)角礫混り砂質土
第4層 オリーブ褐色(2.5Y4/6)シルト・炭化粒子を含む

第14図 40－OO、43・54・57－OS土層図

埋土第Ⅲ層上部から中世の平瓦片（67）が１片、埋土第Ⅰ層から弥生土器24片が出土しており、本遺構は中世のものと判断される。

49－OS　第８図　図版十五

東側斜面の標高約60.5mの地点で長さ約3.3mにわたり検出されている。幅約1.2m・深さ約40mを測り、断面形は浅い「U」字状を呈する。埋土は浅黄色（2.5Y7/3）砂質土層の単一層で、遺物の出土は皆無であった。

42・43・54・56・57－OS　第８・14図　図版十四・十六

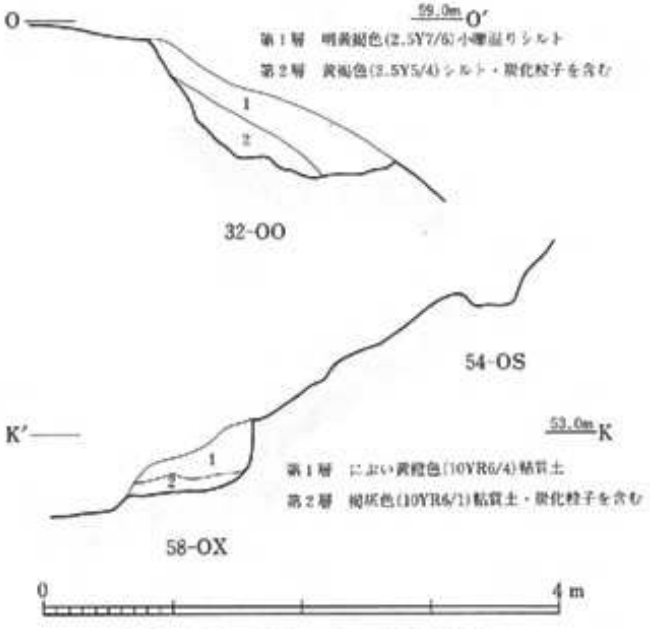
標高約54～55mを測る東側斜面の裾近くに集中して検出された。何れも幅約0.5～1.1m、深さ約38～68cm程の比較的小規模なもので、等高線に平行する方向に掘削されており、底面の高低差から判断すると北流する溝である。埋土の状態や断面観察の結果から、54－OSは43・57－OS埋没後掘削されたものと判断される。42－OSからは黒色土器が１片、弥生土器は54－OSから８片、57－OSからは９片出土しているが図示できるものはない。

C．土壙状遺構

32－OOと40－OOがあり、何れも東側斜面の下部で検出された。

32－OO　第８・15図　図版十五

長さ約3.6m、幅約2.0m、深さ約0.5mを測り、主軸方位を南北におく。平面形は長円形を呈し、底面は船底状をなす。埋土は二層に分層され、埋土第２層には炭化粒子が顕著に観察される。出土遺物は埋土第１層から弥生土器が１片出土しただけである。



第15図　32－ＯＯ、58－ＯＸ土層図

40－OO　第８・14図　図版十六

長さ約4.2m、幅約1.1m、深さ約0.45mを測り、主軸方位を南北におく。平面形は長円形をなし、断面形は「U」字状を呈する。埋土は二層に分層できるが、水平堆積の状況を呈し、埋土の質も他の多くの遺構とは異なっている。土器資料の出土は皆無であったが、底面に密着した状態で25cm×33cm×19cm大の直方体の石材が検出されている。なお、本遺構埋没後54－OSが掘削されている。

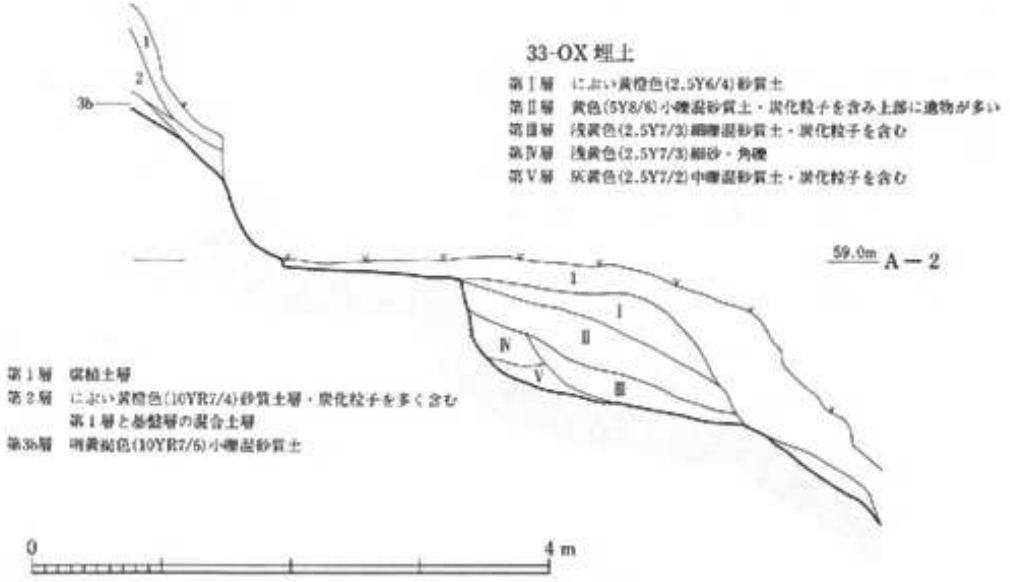
D．その他の遺構

33－OX　第８・16図　図版十七

東側斜面の下部、標高約59mを測る地点で検出された。長さ約11m、幅約２m、深さ約１mを測る。断面形は「L」字状を呈し、底面は平らである。埋土は５層に分層でき、何回かにわたる上方からの土砂の流入により埋没した様子が断面観察から窺える。弥生土器が826片出土しているが、そのほとんどが遺構北半部の埋土第II層上部から出土したもので、埋土の堆積と同様に丘陵の上部から流入したものと判断される。

58－OX　第８・15図　図版十六

東側斜面の裾部、標高約53.2mの地点で検出された。長さ約7.2m、深さ約0.5mを測り、



第16図　33－ＯＸ土層図

現状の断面形は「L」字状をなすが、埋土が水平堆積の状態を呈することから埋没後に本遺構の東側の壁が失われたものと判断される。また、埋土の土質が40－OOと同質である点は留意される。遺物の出土は皆無であった。

ピット状遺構　第8図　図版十五

ピット状の遺構は竪穴住居に付随すると判断されるものを除くと、合計15箇所で検出されたが、建物を構成するようなまとまりを持つものはない。また、遺物を出土したものも少なく、35－OPから弥生土器が24片出土したに過ぎない。

第3節　遺物

A．遺物包含層出土遺物

石器　第17図　図版十八

削器が2点、残核が1点、剥片・石片が10片出土している。すべてサヌカイトを素材にした打製のもので、前二者は後期旧石器時代か縄文時代のものと考えられる。

（1・2）は削器で、いずれもサヌカイトの横長剥片を素材にしており、片面に急角度調整を加えて刃部を構成している。いずれも素材剥片の打点側に現礫面を残している。なお、（2）は33－OXから出土しているが、33－OXの年代に伴わないことが明らかなので、ここで扱っている。（3）は全面がネガティブな面で構成されており、両面で打点をラウンドさせながら不定形な小型剥片を作出した残核と判断される。

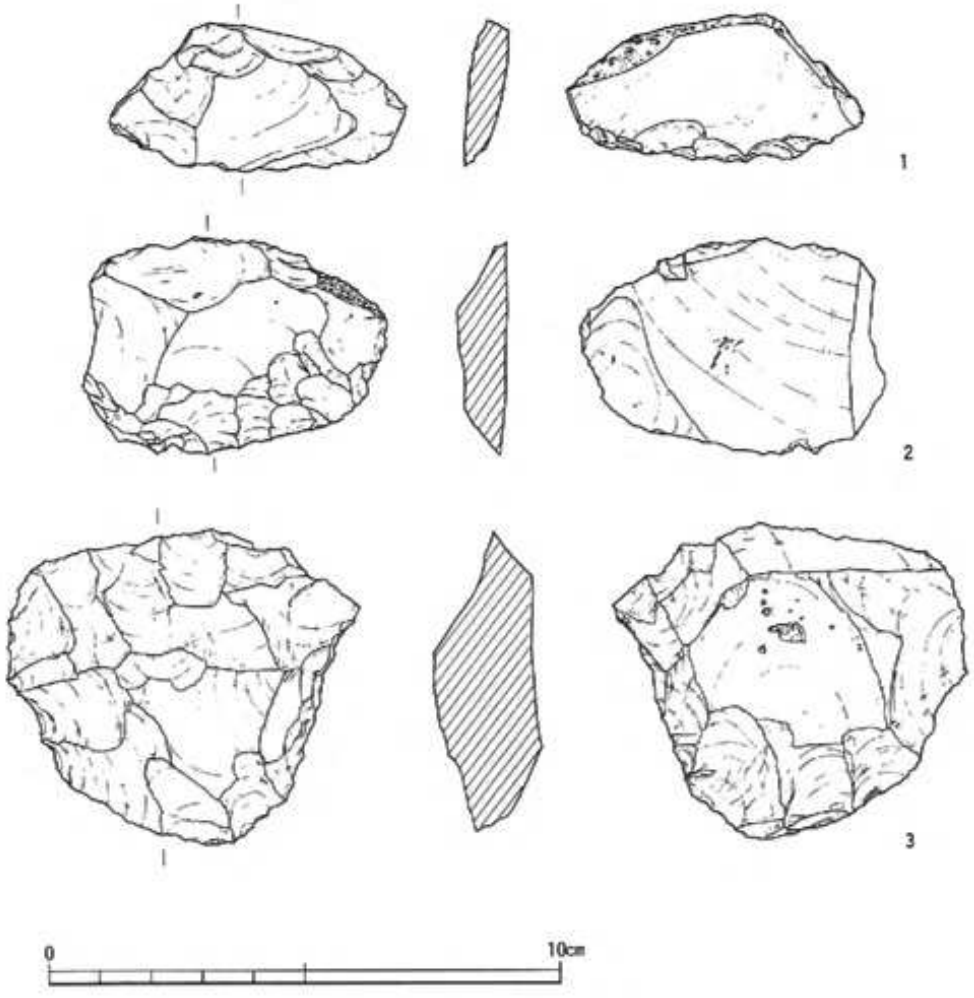
土器　第18図　図版十九・二十二

1,037片の土器資料が出土しているが、その98％が弥生土器である。細片資料が多く、図化できたものは少ない。ここでは弥生土器に限り図示している。

壺（4～15・17）

口縁部の一部しか遺存していないが、口縁部の形態で広口壺・長頸壺・無頸壺の三者に大別でき、広口壺が主体で他は少数である。

広口壺（4～7）には口縁端部を加飾するものとしないものとがある。加飾したものには、口縁端部を断面三角形状に肥厚させて擬凹線を施した（4）や円形浮文を貼付けた



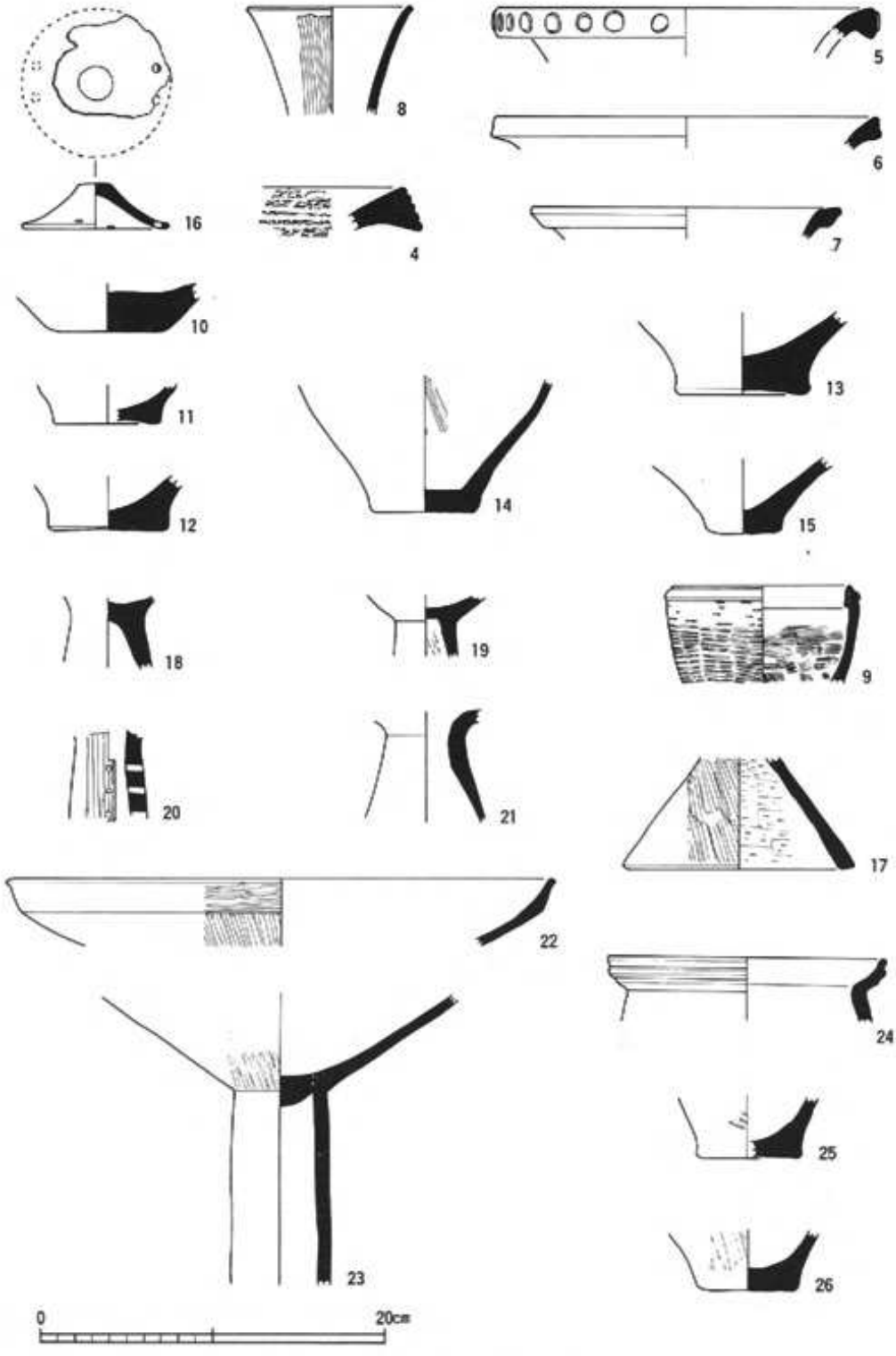
第17図　遺物包含層出土石器

（5）がある。加飾しないものには、口縁端部が拡張されて凹面をなす（6）と角ばって肥厚する（7）がある。

長頸壺（8）は口縁部が逆「八」字型に開き、端部は丸く収める。

無頸壺（9）は口縁端部を内側に折り返して肥厚させたもので、外面に平行タタキメを残し、内面にはハケ調整を加えている。

壺の底部と判断されるものとしては（10～15）があるが、平底状の（10・12・14・15）と（11・13）のような上げ底状をなすものがある。（14）の体部内面には一次調整時のハケ目が確認できる。



第18図　遺物包含層出土土器

蓋（16）

2個一対の紐通し孔がつき、小型の壺の蓋と判断される（16）がある。

鉢（17）

台付鉢の脚部と思われる。逆「八」字状に開き、端部は平坦面をなす。外面にヘラミガキ、内面にはヘラケズリを施す。

高杯（18～23）

大きさで二種に大別できる。

（22・23）は杯部の口径が30cmを超える大型のもので、口縁部に鈍い稜を持つ。（23）はエンタシス状の長い脚柱部と杯部を一体成形しており、円板充塡技法が確認できる。（21）も大型の高杯と思われ、杯部・脚部を一体成形している点では（23）と同様であるが、脚部が「八」字状に開く点が異なっている。小型の高杯（18～20）は杯部・脚部を別作りしたもので、脚柱部を円孔で加飾した（20）としないもの（18・19）がある。（19）の脚部内面にはヘラケズリが確認できる。

甕（24～26）

（24）は所謂「受け口状口縁」をなし、擬凹線文で加飾している。搬入品かどうかは定かではないが、在地系の土器とは異質である。

甕の体部外面の器面状態には、タタキメを残した（25）とヘラケズリを施した（26）がある。

B．遺構出土遺物

5 a－OD出土遺物　第19図　図版二十（27～29）

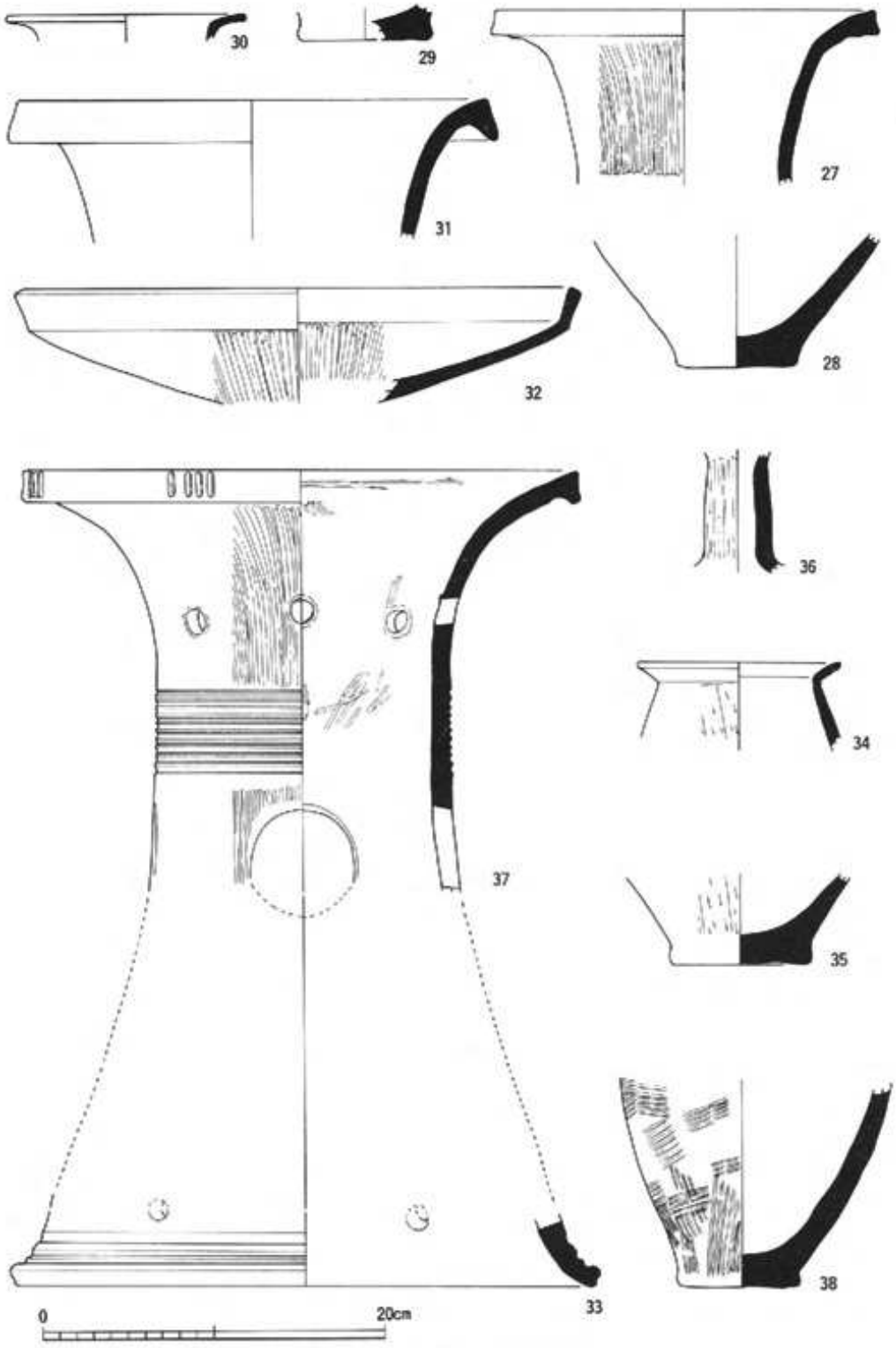
壺53片、甕13片、器種不明土器片117片が出土しているが、図化できたのは壺3点だけである。広口壺（27）は頸部から口縁部にかけてが、逆「L」字状の弧を描き、口縁端部は凹面をなす。（28・29）はいずれも平底状をなす底部片である。

5 b－OD出土遺物　第19図　図版二十－30

壺が4片出土しており、広口壺が1点だけ図化できた。口縁部が逆「L」字状に外反し、端部は僅かに角ばる。

59－OD出土遺物　第19・20図　図版十八・二十・二十二（31～35・40）

壺68片、甕80片、高杯33片、器台2片、器種不明土器355片、叩き石1点が出土してお



第19図　竪穴住居出土土器

り、このうち壺2片、甕3片、器種不明土器11片はピットから出土している。図化できたのは、壺1点、高杯1点、甕2点、器台1点、叩き石1点で、（34）の甕だけが底面に密着した状態で出土した。

広口壺（31）は垂下した口縁端部をもつが、装飾は施されていない。

大型高杯（32）は口縁部が直立気味に立ち上がり鈍い稜をなし、端部は平坦面をなす。

器台（33）は胎土・色調・器形の状況から、46－OD出土の器台（37）と同一個体の脚端部片と判断できる。凹線文・円孔で加飾され端部は凹面をなすが、円孔の正確な数は不明である。

甕（34）は口縁部が「く」字状に外反し、端部は丸く収める。体部外面にはヘラケズリ調整を施す。（35）も体部外面にヘラケズリ調整を加えた甕の底部片である。

叩き石（40）は硬質砂岩の自然礫を利用したもので、一端に僅かに使用痕が観察できる。

46－OD出土遺物　第19・20図　図版十八・二十（36・37・39）

甕28片、高杯31片、器台73片、器種不明土器175片、叩き石1点が出土しているが、このうち図化できたのは高杯・器台・叩き石が1点ずつである。

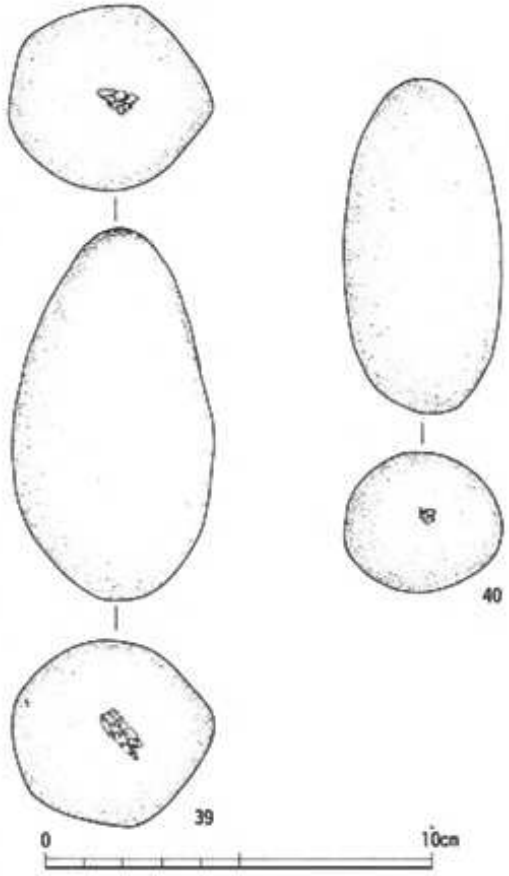
小型高杯（36）は杯部・脚部が一体成形されたものである公算が大である。

器台（37）は口径が30㎝を超える大型のもので、垂下する口縁部を持つ。棒状浮文・擬凹線文・大小の円形透かしで加飾されている。

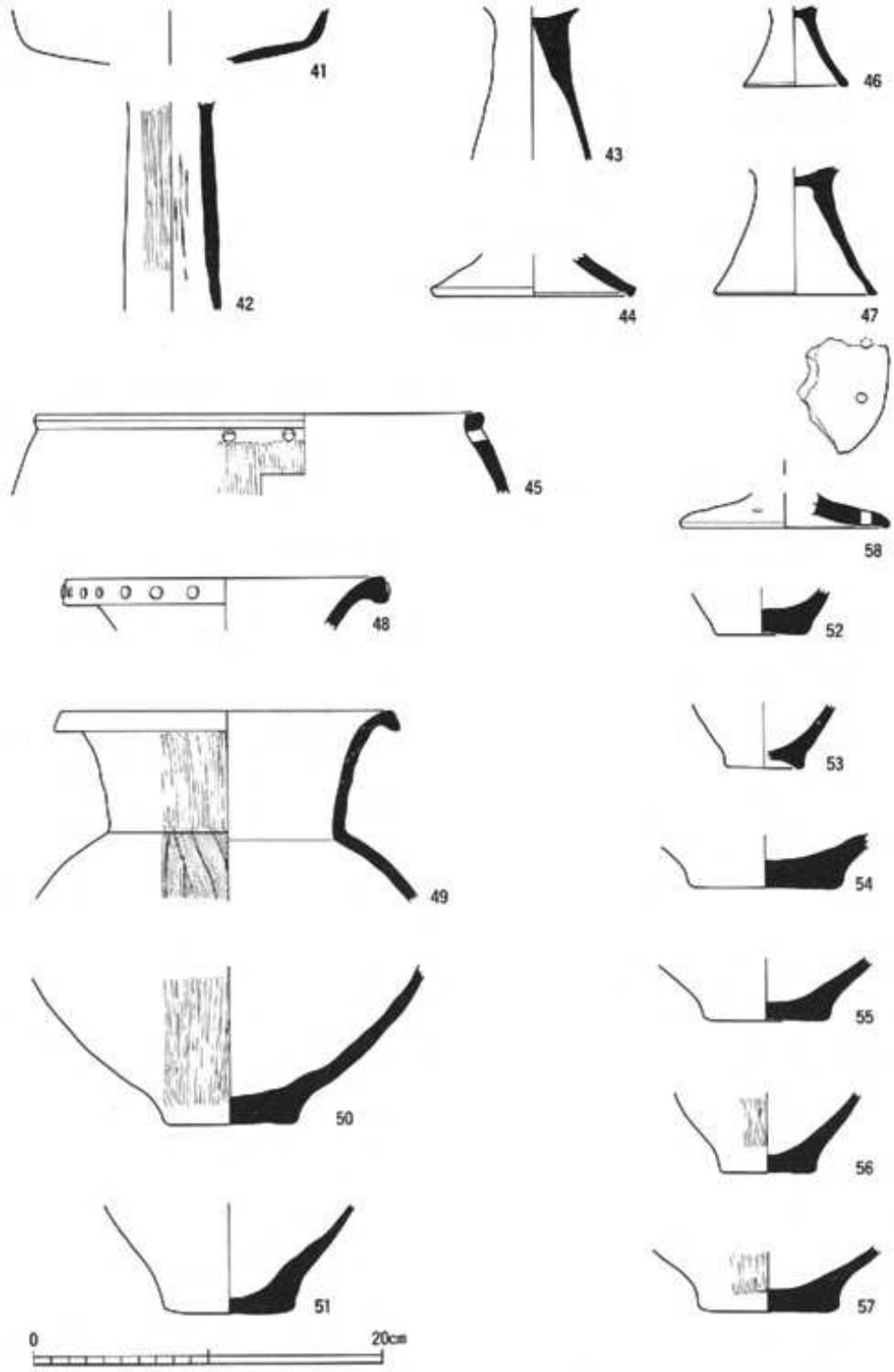
叩き石（39）は硬質砂岩の自然礫を利用したもので、両端に使用痕が観察される。

47－OD出土遺物　第19図　図版二十二(38)

甕27片、高杯2片、器種不明土器118片が出土しており、このうち甕1片、器種不明土器2片が壁溝内出土の分である。そのなかで図化できたのは体部外面にタタキメを残した甕（38）1点だけである。



第20図　46・59－ＯＤ出土叩き石



第21図　33－ＯＸ出土土器

33－OX出土遺物　第21・22図　図版二十一・二十二（41～66）

壺167片、甕230片、高杯30片、鉢８片、蓋７片、器台３片、器種不明土器381片が出土し、このうち高杯４点、鉢３点、壺９点、蓋１点、甕７点が図化できた。

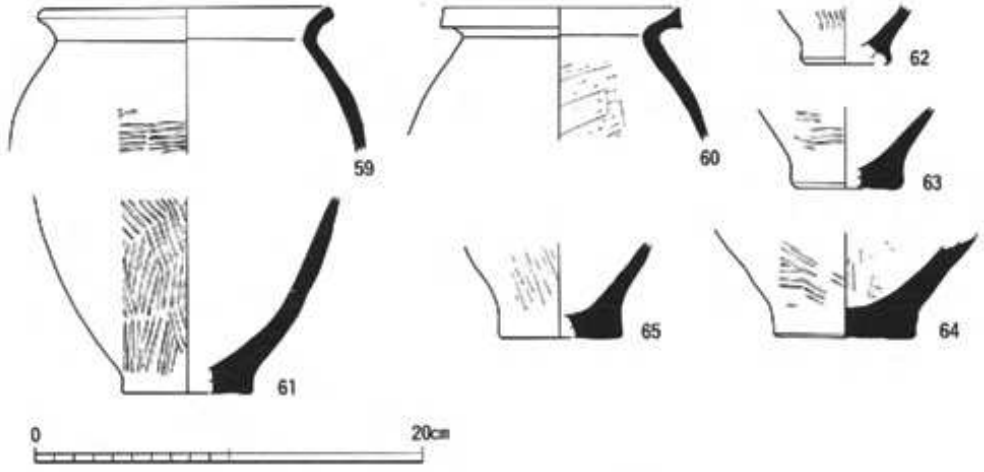
高杯（41～44）　（41～43）は大型高杯と考えられるが、（43）は他と違い脚柱部が「八」字状に開き、杯部・脚部が別作りである。（44）は小型高杯の脚端部片で、端部が僅かに肥厚する。

鉢（45～47）　（45）は大型の器種で口縁端部が角ばって面をなし、２個一対の蓋用の紐通し孔が付く。（46・47）は高杯の脚部とは形態が異なっており、台付鉢の脚部と判断される。何れも端部が尖り気味で平坦面をなす。

壺（48～57・66）　広口壺（48）は口縁端部が肥厚・垂下し、円形浮文で加飾されている。広口壺（49）は口縁端部が外下方に垂下し、頸部にはヘラミガキ調整、体部にはハケ調整を加えている。（50）はヘラミガキ調整を施した底部片であるが、胎土・色調・器形の状況から、（49）と同一個体と判断される。この土器は煮炊きに使用されたらしく、（50）の外面には煤が付いている。その他の底部片（51～57）は、底径の大小・体部の立ち上がりの角度に相違があり様々であるが、（53）のような上げ底状の底部は少数である。（66）は胎土の状況から河内産と判断される広口壺の頸部片である。図化不能で、写真のみ提示したが、口縁部が「く」の字状に外反し、外面にヘラミガキ調整を施している。

蓋　（58）は壺の蓋と考えられるもので、口縁部が屈曲し、端部は丸く収めている。２個一対の紐通し孔がつく。

甕（59～65）　（59）は口縁部が「く」字状に外反し、端部は丸く収めている。（60）



第22図　33－ＯＸ出土土器

は口縁部が「く」の字状に外反し、端部は上下に拡張されている。体部内面にヘラケズリ調整を施した少数例である。底部片（61～65）は平底状のものが多く、体部外面にはタタキメを残すもの（61～64）とヘラケズリを施すもの（65）とがあるが、後者の例は少数である。内面はナデ調整を加えるものが多いが、（64）のように一次調整にハケ調整を施したことが確認できる例もある。

7－OS出土遺物　図版二十二－67

（67）は凹・凸両面に離れ砂を使用した一枚作りの平瓦片である。

この他、竪穴住居11－ODから壺27片、甕1片、器種不明土器32片が出土しているが、図化できるものは無い。その他の溝状遺構・土壙状遺構・ピット状遺構出土遺物についても同様に図化できるものはない。

第Ⅳ章　遺物の検討

A．出土遺物の構成と出土層位　　第１表

今回の調査では、近代のものも含めれば総数3,295片の遺物が出土した。調査面積に対しては比較的少数の遺物で、当遺跡の立地条件や遺跡としての存続期間を反映した数字といえる。その構成比は第１表－１に示した如くで、弥生土器片がほとんどを占める。弥生時代に比定できる石器が、叩き石以外には確認できないことは注目するに値しよう。1987年刊行の報告書でも指摘されているように、鉄器が存外豊富に所有されていたことを想定すべきであろう。

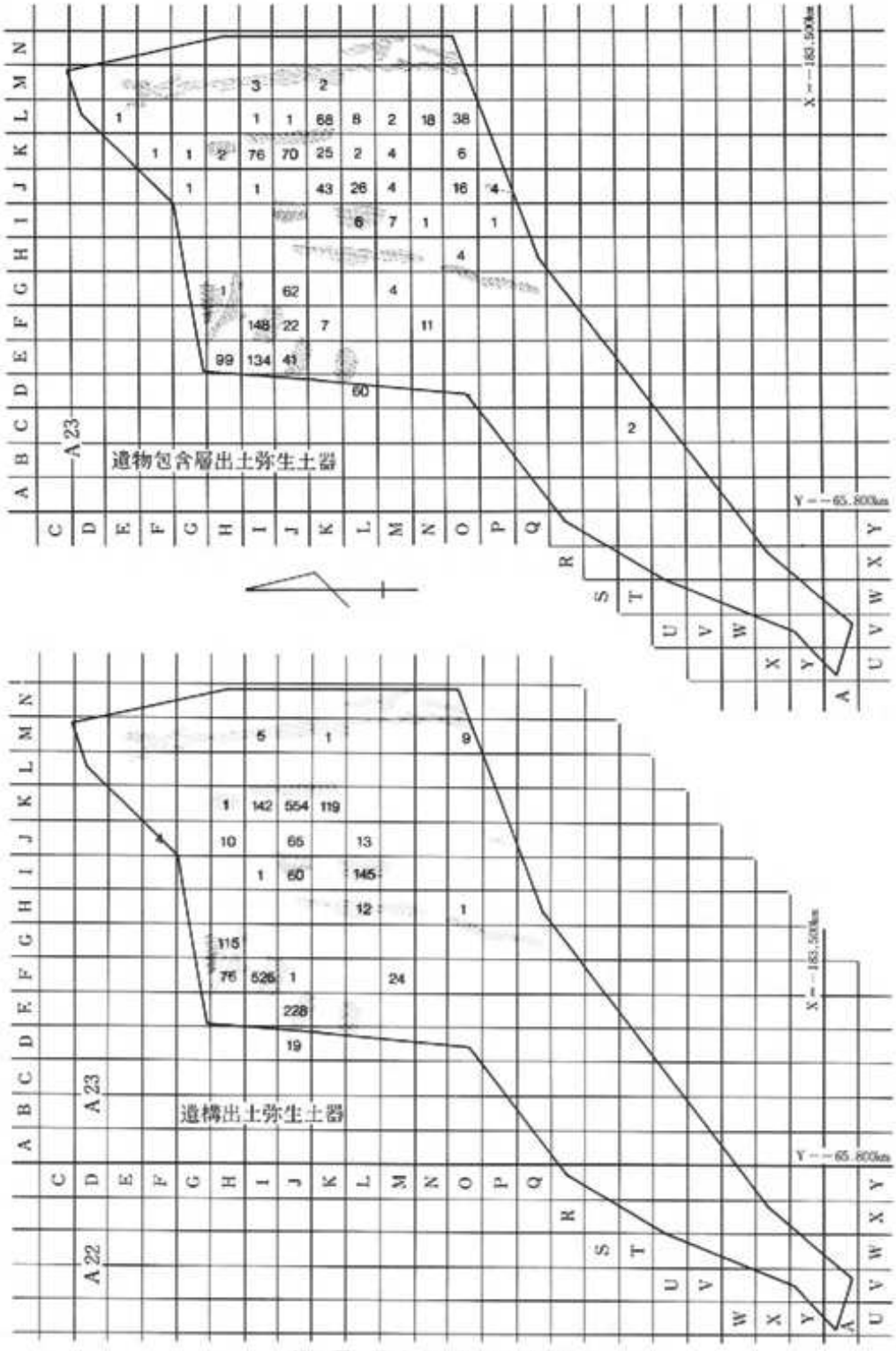
次に出土遺物の主体を占める弥生土器の出土層位について第１表－２を見てみる。遺構から出土したものが半数以上を占め、次いで第４層、第３層、第１・２層の順となっている。各層の再堆積の具体的様相は必ずしも明瞭では無く、やや問題を残すにしても、概ね古い時期に流失・堆積した層ほど遺物の包含数が多いといえよう。

B．弥生土器の平面的分布状況　第23図

弥生土器の平面的分布状況を見ることにする。第23図に第１層から基盤層に至る各層から出土した弥生土器の数量と、遺構から出土した数量を夫々４ｍメッシュ単位に集計して示した。図中のトーン部分は検出された主たる遺構である。

まず、遺構から出土した遺物の分布をみると、ほとんどが検出された住居跡周辺に集中していることがわかる。検出された住居跡が、壁や床面の大半を失っているような状況であったにも関わらずこのような傾向を示すのは、おそらく、住居跡の壁や床面が残された遺物とともに流失を始めたときに、下方の遺構が未だ窪んだ状態のままであったためと考えられる。そうだとすれば、住居跡出土遺物が直接的には住居跡の年代を決定するような出土状況でないにせよ、その廃絶時期と然程年代差のない遺物が検出されていると見做せよう。

次に遺構以外の各層から出土した弥生土器の平面的分布状況を見ることにする。遺構が検出された斜面にはほぼ万遍無く分布しているが、面積的には調査区の約三分の一を占める南側のエリアからは、僅か２片しか出土していないことがわかる。遺構の密度が濃い部



第23図　弥生土器地区別出土数量

分には、広範囲にそれなりの数の遺物が分布していることから判断すると、遺物の出土が皆無に近い南側エリアでは、今では失われてしまった丘陵頂上部にも本来遺構が存在しなかった公算が大と言えよう。

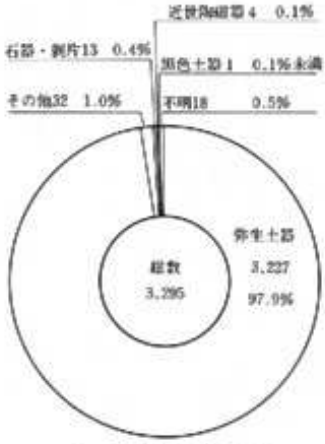
C．弥生土器

器種

器種構成の具体的様相については次に記すことにして、ここでは今回出土した弥生土器の形態・技法について簡単に整理することにする。ただし、細片資料ばかりで何れの器種も全容を窺えるものはない。

高杯

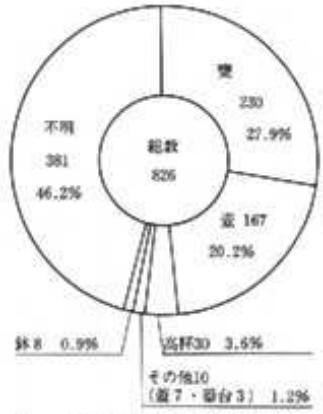
三種のものが確認される。1．大型で円筒状の長い脚柱部がつき、杯部に鈍い稜を有す



1．全出土遺物の内訳

2．弥生土器出土層位

3．出土弥生土器器種別数量
(表面採集器を含む)



4．33-OX出土土器器種別数量

第1表　遺物の構成

る。杯部と脚部を一体成形し、円板充填技法でつくられたもの。2．小型で脚柱部が「八」の字状に開き、杯部と脚部が別作りされている。脚柱部を円孔で装飾するものとしないものがある。3．大型のものと推察され、脚柱部が「八」の字状に開くが、杯部と脚部が一体成形されている。このタイプは極めて少数例である。

いずれのタイプも器面が遺存しているものについては、ヘラミガキが確認できる。

壺

五種のものが確認される。1．口縁端部を外下方に肥厚垂下させたもので、口縁端部を擬凹線や円形浮文で装飾するものとしないものがある。2．口縁端部を上下に拡張したもの。3．口縁部が「く」の字状に外反し、角ばって肥厚するもの。4．長い口縁部が頸基部から逆「八」の字状に開くもの。5．粗製の無頸壺。

1～3は広口壺である。壺全体では1．のタイプが多数を占め、その他は少数である。調整については、体部内面はナデ調整を加えるのを通例とするが、一次調整にハケ調整を行なったことが確認できるものや、無頸壺のようにハケ調整だけのものも少数認められる。体部外面はナデ調整のもの、ヘラミガキを施すもの、ハケ調整とヘラミガキ調整を混用するもの、無頸壺のようにタタキメを残したものがあるが、後二者は少数である。

甕

三種が確認できる。1．口縁部が「く」の字状もしくは逆「L」字状に外反し、端部は丸く収める。2．口縁部が「く」の字状に外反し、端部を上下に拡張するもの。3．所謂「受け口状口縁」のもの。

1．のタイプが多く、他は少数である。体部外面にタタキメを残したものが多いが、ヘラケズリを加えた例も相当数確認される。内面にはナデ調整を加えるのを通例とするが、一次調整にハケ調整を施したことが確認できる例や、ヘラケズリを施した例が少数ある。

鉢

不明な点が多いが、台付のものが多数を占めると思われる。形態が甕の底部と近似した小型の鉢は確認できていない。

弥生土器の胎土・色調

今回出土した弥生土器の多くは、胎土中に石英とおもわれる白色砂粒や所謂「クサリ礫」を含み、橙色・黄灰色・褐灰色系の色調を呈するものが多い。その中で、胎土中に特定の岩石粒が含まれ、他地域からの搬入品と認定できるものが少数存在している。

最も顕著に識別できる例は、（66）の壺で胎土中に角閃石の細粒を多く含み、チョコレート色を呈している。生駒西麓を中心とする河内地域の産と認定できるが、他にはない。次に色調は他の多くの例と何等変化はないが、胎土中に結晶片岩と呼ばれる岩石粒を含み、もよりの地域としては和歌山県の紀ノ川左岸が産地と推定できる土器がある。結晶片岩は合計３片の土器に確認でき、そのうちの２片については器種を甕と特定できる。

弥生土器の器種別構成比　第１表

今回の調査では、遺構から出土した資料と雖も、遺構と同時期性を物語るような出土状況をしめすものは少ない。また、遺物の器種別構成比を検討するにたる数量を出土した遺構も少なく、33－OX出土土器が挙げられるだけである。

33－OX出土土器は総数826片を数えることができ、出土した弥生土器総数の約25％を占める。33－OX出土土器の器種別構成比について第１表－４を見てみる。器種の判別が不可能な遺存状態の悪い細片資料を除外すると、甕・壺は近似した数量であるが、甕が僅かに壺をうわまわり、次いで高杯、蓋・器台、鉢の順となっている。この器種別の構成比の序列は第１表－３に見る如く、出土した弥生土器総体についても然程変化がなく、ほぼ同数の甕・壺の順位が入れ替わるだけである。

次に、昭和60年の調査で検出された自然流路から出土した土器の器種別構成比[註1]を見ることにする。報告によれば、甕（36％）、高杯（34.9％）、壺（19.8％）、蓋（3.2％）、鉢（３％）…以下省略…となっている。今回の調査の結果に比べると、高杯が数倍以上の比率を占め、この点では大きく異なる。しかしながら、供膳用の食器と目されている高杯・鉢の比率に限れば、高杯が圧倒的多数を占める点は共通している。そして、今回の調査資料では高杯185片のうち、大型高杯（高杯Ａ）が94片と過半数を占める。また、鉢は台付鉢がほとんどで、ラッパ型の小型の鉢は確認されていない。

つまり、滑瀬遺跡の弥生社会の存続期間内は、供膳用の食器としては専ら高杯が使用され、しかも、鉢・高杯には個人用食器と見るべき小型のものは少数と言えよう。

弥生土器の年代

先にも触れたように、良好な一括性を示す状況で出土した遺物は皆無に近く、遺物の遺存状況も不良である。このなかで比較的一括性に富むと評価しうる33－OX出土土器と全出土土器を比較した場合、さきに見てきたように各器種の特徴・器種構成など共通する点

が多いと言える。つまり、分析条件の不備という前提下ではあるが、滑瀬遺跡で今回出土した土器総体をかなり短期間の一群の土器と認定しても現状では大過ないものといえよう。

そして、この一群の土器は一言で言うと、Ⅳ様式的な様相を色濃く残すものの、Ⅴ様式的な様相を備えたものと言える。例えば、大型高杯はエンタシス状の脚柱部をもち、杯部の脚部の一体成形・円板充塡技法などⅣ様式的な土器と言えるが、杯部の稜がかなり明瞭化してきている。また、小型高杯には杯部・脚部を別作りしたⅤ様式の特徴を備えたものが見られる。

壺についても、広口壺は口縁部を肥厚垂下させ、円形浮文などをあしらい加飾性が強いものが多いが、頸部から口縁部のカーブが逆「コ」字状を呈するものなどⅤ様式的な様相が認められる。そして、広口壺や器台の装飾には擬凹線が多用されており、加飾方法としてはⅤ様式のテクニックが使われていると言える。また、長頸壺のようにⅤ様式に盛行する器種が見られる。

甕については、口縁部がⅣ様式的な形態を留めたものが多く、体部外面にヘラケズリを施したものもあるが、「受け口状口縁」のものが見られるし、体部外面にタタキメの付く例が多い。総体として、Ⅴ様式的な様相が濃いものといえる。

今回の調査で出土した土器に以上のような特徴を認めるとすれば、この一群の土器は亀井遺跡SD－12・14出土土器[註2]や西ノ辻1265番地出土土器[註3]に近いものと評価できよう。つまり、今回の調査で出土した土器群は、時期的にはⅤ様式初頭に位置づけることが可能と言える。

註1）「滑瀬遺跡発掘調査報告書」　大阪府教育委員会・財団法人大阪府埋蔵文化財協会　1987
註2）「亀井遺跡Ⅱ」　財団法人大阪文化財センター　1984
註3）佐原　真　編「弥生土器Ⅰ」　ニューサイエンス社　1983

第Ⅴ章　まとめ

滑瀬遺跡の弥生集落について

過去の調査で判明した分を含め、拡張された住居もそれぞれ１棟ずつ数えると、滑瀬遺跡は少なくとも23棟以上の竪穴住居と数棟の掘立柱建物で構成されていたことが判明した。しかしながら、竪穴住居からの良好な出土遺物に恵まれず、個々の竪穴住居の新旧の関係・厳密な時期などは定かでないものが多い。つまり、滑瀬遺跡の弥生集落が一時期にどの程度の規模の集団であったか、また、何時期に区分するのが妥当かは不明と言わざるを得ない。現状では、出土遺物総体をとおして集落の大まかな様相が窺えるに過ぎない。

今回調査を行った通称「ナメクジ山」の西側丘陵では、合計８棟の竪穴住居が検出されたが、そこから出土した弥生土器は先に検討してきたように畿内第Ⅴ様式の初頭に比定される土器群であった。一方、前回調査された「ナメクジ山」と平野部では合計15棟の竪穴住居と弥生時代の自然流路が検出されたが、出土土器のなかには凸帯文の付く壺などがあり、その他にも今回出土した土器に対して古く位置づけられる土器が散見される。

これらの古い土器も竪穴住居にともなって出土したものではなく、断言はできないが、滑瀬遺跡の集落の営みの開始はⅣ様式の初頭に遡る可能性があるといえる。そして、今回調査した区域には、こうした古い土器が確認されないことから見れば、西側丘陵部は相対的に新しい集落部分である公算が強いといえる。西側丘陵部で隅丸方形プランの竪穴住居が１棟検出されているのも、こうした様相の証左かも知れない。そして集落の廃絶はⅤ様式の初頭といえるであろう。無論、集落がこの土器の指し示した期間内は連綿と存続したのか、断続的なものであったのかは今のところ詳らかではない。

ところで、これらの竪穴住居は平野部で検出された４棟を除くと、いずれも急峻な丘陵斜面か頂上部で検出されている。こうした竪穴住居の占地の状況と、遺跡自体が小規模な谷水田ならいざしらず、付近に適当な可耕地を求めるのが困難な地域に立地していることや、遺跡の存続時期を勘案すれば、滑瀬遺跡は所謂「高地性集落」のひとつと考えて差しつかえないものと思われる。

今のところ、当遺跡と有機的関係の深い低地の遺跡は明らかではない。今後この地域に押し寄せる開発の波と共に、幸か不幸か、この点も明らかになって行くものと思われる。

遺物一覧表

番号	種類	出土地点 遺構名 層位	法量 (cm) (g)	胎土	焼成	色調	成形・調整・手法
1	削器	A23IH 1−0X 第5層	器長 5.765 器幅 2.910 器厚 0.825 重量 16.510				
2	削器	A23JK 33−0X 第II層	器長 5.955 器幅 4.215 器厚 0.980 重量 32.640				
3	石核	A23IH 北部埋没谷 第5層	器長 6.905 器幅 6.190 器厚 2.075 器重 93.310				
4	弥生土器 壺	A23IE 第4層	――	約1㎜未満の砂粒をわずかに含む。 クサリ礫をわずかに含む。	硬	外面：黄色 (2.5Y8/6) 断面：黄灰色 (2.5Y5/1) 内面：黄色 (2.5Y8/6)	内・外面　ヨコナデ調整 口縁部に四条の擬凹線文
5	弥生土器 壺	A23KK 第2層	口径 22.2 残存高 1.7	約1㎜大の砂粒をわずかに含む。	硬	外面： 断面： 内面： 浅黄橙色 (10YR8/4)	内・外面　ヨコナデ調整 口縁部に直径約1㎝の円形浮文
6	弥生土器 壺	A23KJ 第2層	口径 22.0 残存高 1.9	約4㎜大の石粒をわずかに含む。	中	外面：にぶい黄橙色 (10YR7/4) 断面：にぶい黄褐色 (10YR4/3) 内面：にぶい黄橙色 (10YR7/4)	内・外面　ヨコナデ調整
7	弥生土器 壺	A23OL 第3層	口径 18.0 残存高 1.9	約1㎜大の砂粒を多く含む。 クサリ礫をわずかに含む。	中	外面：にぶい黄橙色 (10YR7/4) 断面：明黄褐色 (10YR7/6) 内面：にぶい橙色 (5YR7/3)	内・外面　調整不明
8	弥生土器 壺	A23KJ 第3層	口径 9.7 残存高 6.4	約1㎜未満の砂粒をわずかに含む。 クサリ礫をわずかに含む。	中	外面： 断面： 内面： 橙色 (2.5YR7/8)	外面　ヘラミガキ調整 口縁部　内・外面　ヨコナデ調整 内面　タテ方向のナデ調整
9	弥生土器 壺	A23HE 第4層	底径 10.1 残存高 5.7	約1㎜未満の砂粒をわずかに含む。 クサリ礫をわずかに含む。	中	外面： 断面： 内面： 浅橙色 (7.5YR8/4)	外面　4本／㎝の平行タタキ目 口縁部　内・外面　ヨコナデ調整 内面　14本／㎝のハケ調整
10	弥生土器 壺	A23OL 第3層	底径 6.2 残存高 2.7	約1〜2㎜大の白色の砂粒をわずかに含む。 約4〜5㎜大のクサリ礫をわずかに含む。	硬	外面：淡黄色 (2.5Y8/3) 断面：灰白色 (2.5Y7/1) 内面：浅黄橙色 (10YR8/3)	外面　ナデ調整 内面　調整不明
11	弥生土器 壺	A23IK 第2層	底径 6.2 残存高 2.4	約1㎜大の砂粒を含む。	硬	外面： 断面： 内面： 橙色 (5YR7/6)	内・外面　ナデ調整 底部未調整
12	弥生土器 壺	A23LD 第3層	底径 6.9 残存高 3.2	約1㎜未満の砂粒をわずかに含む。 クサリ礫多く含む。	中	外面：橙色 (5YR7/6) 断面：橙色 (5YR6/6) 内面：橙色 (5YR7/6)	外面　ナデ調整 外面底部周縁部　ヨコナデ調整 底部　ナデ調整 内面　ナデ調整

番号	種類	出土地点 遺構名 層位	法量 (cm)　(g)	胎土	焼成	色調	成形・調整・手法
13	弥生土器 壺	A23PJ 第1層	底径　7.4 残存高　4.8	約2mm大の砂粒をわずかに含む。	硬	外面：浅黄色 (7.5YR8/3) 断面：橙色 (7.5YR7/6) 内面：浅黄色 (10YR8/4)	外面　タテ方向ナデ調整 一部ヨコナデ調整 底部　指頭痕残る 内面　調整不明
14	弥生土器 壺	A23IE 第4層	底径　5.8 残存高　7.7	約1mm未満の砂粒を多く含む約1～3mm大の黒色の砂粒を多く含む。	硬	外面：にぶい赤褐色 (2.5YR5/4) 断面：黄色 (2.5Y8/8) 内面：灰赤色 (2.5YR6/2)	外面　3～4本／cmの平行タタキ目 外面下部　ナデ調整 内面　一次調整　10～12本／cmのハケ調整 二次調整　ナデ調整
15	弥生土器 壺	A23KL 第3層	底径　4.3 残存高　4.4	約2mm大の砂粒をわずかに含む。	硬	外面：にぶい橙色 (5YR6/4) 断面：橙色 (5YR7/6) 内面：橙色 (5YR7/6)	内・外面　ナデ調整
16	弥生土器 壺	A23JK 第2層	口径　8.7 残存高　2.7	約1mm大の砂粒をわずかに含む。	硬	外面： 断面： 内面： 黒褐色 (7.5YR2/2)	内・外面　ナデ調整
17	弥生土器 台付壺	A23IK 第3層	底径　13.4 残存高　6.5	約1mm大の砂粒をわずかに含む。 クサリ礫をわずかに含む。	硬	外面：橙色 (5YR7/6) 断面：浅橙色 (5YR8/4) 内面：橙色 (5YR7/6)	外面　3本／cmのヘラミガキ調整 脚端部　ナデ調整 内面　横方向のヘラケズリ調整
18	弥生土器 高杯	A23JK 第2層	― 残存高　4.1	約1mm大の砂粒をわずかに含む。	硬	外面：浅黄橙色 (7.5YR8/4) 断面：にぶい橙色 (5YR7/4) 内面：橙色 (5YR7/8)	脚部外面　調整不明 脚部内面　ナデ調整
19	弥生土器 高杯	A23IE 第4層	― 残存高　3.6	約1mm未満の砂粒をわずかに含む。 クサリ礫をわずかに含む。	中	外面：黄色 (2.5Y8/6) 断面：浅黄色 (7.5YR8/6) 内面： 脚部：褐灰色 (10YR4/1) 杯部：黄色 (2.5YR8/6)	内・外面　調整不明
20	弥生土器 高杯	A23IK 第3層	― 残存高　5.2	約1mm未満の砂粒をわずかに含む。	硬	外面：灰褐色 (7.5YR4/2) 断面：にぶい黄橙色 (10YR7/3) 内面：灰褐色 (7.5YR6/2)	脚部外面　2本／cmのヘラミガキ調整 脚部内面　ナデ調整 三個一対の円孔
21	弥生土器 高杯	A23MK 第2層	― 残存高　6.6	約2mm大の砂粒を多く含む。	中	外面：浅黄橙色 (10YR8/4) 断面：にぶい黄橙色 (10YR7/4) 内面：浅黄橙色 (10YR8/4)	内・外面　調整不明
22	弥生土器 高杯	A23IE 第4層	口径　31.8 残存高　3.9	約1mm未満の砂粒をわずかに含む。 クサリ玉礫をわずかに含む。	中	外面： 断面： 内面： にぶい橙色 (5YR7/4)	杯部　内・外面　ヨコナデ調整 杯部外面　4～5本／cmのヘラミガキ調整
23	弥生土器 高杯	A23HE 第4層	― 残存高　17.2	約1mm大の砂粒をわずかに含む。 クサリ礫をわずかに含む。	中	外面：橙色 (5YR7/6) 断面：黄色 (2.5Y8/6) 内面：黄色 (2.5Y8/6)	外面　一部に3～4本／cmのヘラミガキ調整 脚部内面　ヨコナデ調整 杯部内面　調整不明 一体成形

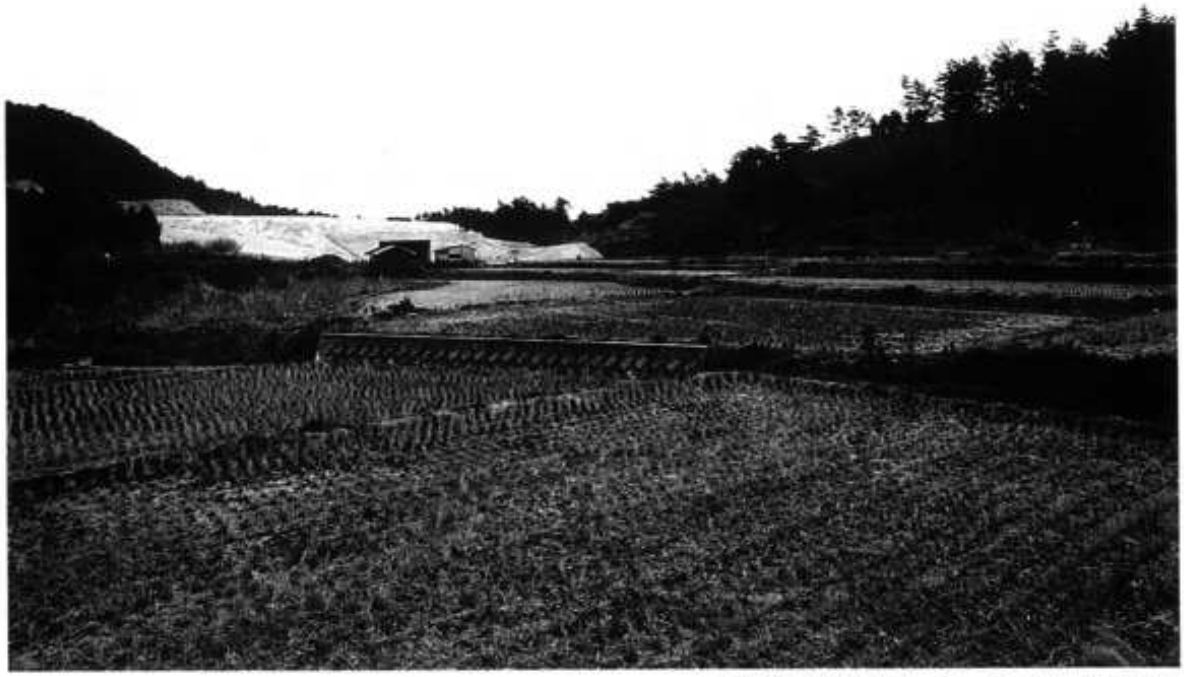
番号	種類	出土地点 遺構名 層位	法量 (cm) (g)	胎土	焼成	色調	成形・調整・手法
24	弥生土器 壺	A23ⅠK 第2層	口径 16.0 残存高 4.9	約2mm大の白・灰色の砂粒をわずかに含む。	硬	外面：明赤褐色 (2.5YR5/6) 断面：橙色 (7.5YR7/6) 内面：明赤褐色 (2.5YR5/6)	外・内面　ナデ調整 口縁部　ヨコナデ調整 二条の凹線文
25	弥生土器 壺	A23ⅠK 第2層	底径 5.4 残存高 3.6	約2mm大の砂粒をわずかに含む。	硬	外面：橙色 (2.5YR6/6) 断面：橙色 (2.5YR6/6) 内面：浅黄橙色 (10YR8/4)	外面　3本／cmの平行タタキ目 ナデ調整 内面　調整不明
26	弥生土器 壺	A23ⅠE 第4層	底径 5.6 残存高 3.6	約1mm未満の砂粒を多く含む。 クサリ礫をわずかに含む。	中	外面：褐色 (10YR4/4) 断面：褐色 (10YR4/4) 内面：黒色 (10YR1.7/1)	外面　ヘラケズリ調整 外面底部　ナデ調整 内面　ナデ調整 一次調整にヘラケズリ調整
27	弥生土器 壺	A23HG 5a－00	口径 22.0 残存高 10.2	約2mm大の砂粒を多く含む。	硬	外面：橙色 (7.5YR7/6) 断面：橙色 (7.5YR6/6) 内面：橙色 (7.5YR7/6)	外面　5～6本／cmのヘラミガキ調整 口縁部　内・外面　ヨコナデ調整 内面　ナデ調整
28	弥生土器 壺	A23HG 5a－00	底径 7.0 残存高 8.0	約2mm大の砂粒を多く含む。	硬	外面：にぶい橙色 (7.5YR7/3) 断面：にぶい橙色 (5YR6/3) 内面：橙色 (5YR6/6)	外面　調整不明 内面　ナデ調整
29	弥生土器 壺	A23HG 5a－00	底径 8.0 残存高 2.0	約2mm大の砂粒を多く含む。	硬	外面：橙色 (5YR7/8) 断面：にぶい橙色 (7.5YR6/4) 内面：――	外面　ナデ調整 内面　調整不明
30	弥生土器 壺	A23HF 5b－00	口径 14.0 残存高 1.6	約2mm大の砂粒を多く含む。	中	外面：橙色 (5YR7/6) 断面：にぶい橙色 (5YR7/4) 内面：橙色 (5YR7/6)	外面　ヨコナデ調整 内面　調整不明
31	弥生土器 壺	A23ⅠF 59－00 上層	口径 21.0 残存高 6.3	約1mm未満の砂粒をわずかに含む。 クサリ礫をわずかに含む。	中	外面：黄色 (2.5Y8/6) 断面：黄橙色 (10YR8/6) 内面：黄色 (2.5Y8/6)	内・外面　調整不明 口縁部　内外面　ヨコナデ調整
32	弥生土器 高杯	A23ⅠF 59－00 下層	口径 31.8 残存高 6.7	約1～3mm大の砂粒をわずかに含む。 クサリ礫をわずかに含む。	硬	外面：黄色 (2.5Y8/6) 断面：橙色 (2.5Y7/8) 内面：黄色 (2.5Y8/6)	底部外面　3本／cmのヘラミガキ調整 口縁部　内外面　ヨコナデ調整 脚部内面　3本／cmのヘラミガキ調整
33	弥生土器 器台	A23ⅠF 59－00 上層	底径 33.5 残存高 3.9	約1～2mm大の砂粒をわずかに含む。	硬	外面： 断面： 内面： 橙色 (5YR6/8)	脚端部　内・外面　ヨコナデ調整 外面に三条の凹線文 直径 1.3～1.4cmの円孔
34	弥生土器 壺	A23ⅠF 59－00 成面直上	口径 12.0 残存高 5.2	約1mm未満の白色の砂粒をわずかに含む。	硬	外面：褐色 (10YR4/4) 断面：黒色 (10YR1.7/1) 内面：にぶい黄橙色 (10YR6/4)	外面　ヘラケズリ調整 口縁部　内外面　ヨコナデ調整 内面　調整不明

番号	種類	出土地点 遺構名 層位	法量 (cm) (g)	胎土	焼成	色調	成形・調整・手法
35	弥生土器 壺	A23ＩＦ 59−00 下層	底径 6.3 残存高 4.1	約2㎜大の砂粒を多く含む。	中	外面：灰黄褐色 (10YR5/2) 断面：にぶい黄橙色 (10YR7/2) 内面：にぶい黄橙色 (10YR7/2)	外面 ヘラケズリ調整 底部周縁部 ヨコナデ調整 底部 未調整 内面 調整不明
36	弥生土器 高杯	A23ＪＥ 46−00	― 残存高 7.0	約1㎜未満の砂粒をわずかに含む。 クサリ礫をわずかに含む。	硬	外面：浅黄橙色 (10YR8/4) 断面：赤褐色 (10R5/3) 内面：黒色 (10YR2/1)	脚部外面 一次調整 2本／㎝のヘラミガキ調整 二次調整 ナデ調整 脚部内面 ヨコナデ調整
37	弥生土器 器台	A23ＪＥ 46−00 埋土上層	口径 32.0 残存高 24.5	約1～2㎜大の砂粒をわずかに含む。	硬	外面： 断面： 内面： 橙色 (5YR6/8)	外面 4本／㎝のヘラミガキ調整 口縁部 内・外面 ヨコナデ調整 内面 ナデ調整・ヘラミガキ調整 口縁部に4個1組の棒状浮文 脚部外面に十条の櫛描線文 直径1.4㎝・直径6㎝の円形透かし
38	弥生土器 壺	A23ＬＩ 47−00 上層	底径 7.3 残存高 12.1	約1㎜大の白色灰色の砂粒をわずかに含む。	硬	外面：にぶい橙色 (2.5YR6/4) 断面：橙色 (2.5YR7/6) 内面：橙色 (2.5YR7/6)	外面 3本／㎝の平行タタキ目 内面 タテ方向のナデ調整
39	叩石	A23ＪＥ 46−00 上層	器長 9.450 器幅 5.400 重量 266.980				
40	叩石	A23ＩＦ 59−00 上層	器長 8.570 器幅 4.125 重量 170.060				
41	弥生土器 高杯	A23ＫＫ 33−0X 第Ⅱ層	― 残存高 3.0	約2～4㎜大の灰白色・褐色の砂粒を多く含む。	中	外面：淡黄色 (2.5Y8/4) 断面：にぶい黄橙色 (10YR7/4) 内面：橙色 (7.5Y7/6)	杯部外面 調整不明 杯部内面 ナデ調整
42	弥生土器 高杯	A23ＪＫ 33−0X 第Ⅱ層	― 残存高 11.9	約1～4㎜大の白色砂粒をわずかに含む。	硬	外面：橙色 (7.5YR7/6) 断面：淡黄色 (2.5Y8/4) 内面：橙色 (7.5Y7/6)	脚部外面 4～5本／㎝のヘラミガキ調整 脚部内面 シボリ目
43	弥生土器 高杯	A23ＩＫ 33−0X 第Ⅱ層	― 残存高 8.7	約1㎜大で灰白色の砂粒をわずかに含む。 約7㎜大の石粒をわずかに含む。	中	外面：黄橙色 (7.5YR7/8) 断面：明黄褐色 (10YR7/6) 内面：浅黄橙色 (10YR8/3)	脚部外面 4～5本／㎝のヘラミガキ調整 脚部内面 ナデ調整 杯部底部内面 ナデ調整
44	弥生土器 高杯	A23ＫＫ 33−0X 第Ⅱ層	底径 11.3 残存高 2.4	約1㎜未満の黒色・褐色の砂粒をわずかに含む。	硬	外面：にぶい橙色 (5YR7/4) 断面：明褐灰色 (7.5YR7/2) 内面：にぶい褐色 (7.5YR6/3)	脚部外面 ナデ調整 脚端部外面 ヨコナデ調整 脚部内面 ナデ調整
45	弥生土器 鉢	A23ＪＫ 33−0X 第Ⅱ層	口径 25.4 残存高 4.6	約1㎜未満の砂粒を多く含む。 クサリ礫を多く含む。	中	外面： 断面： 内面： 黄色 (2.5Y8/6)	外面 3～4本／㎝のヘラミガキ調整 口縁部外面 ヨコナデ調整 内面 ナデ調整 口縁部に直径0.8㎝の2個一対とおもわれる円孔

番号	種類	出土地点 遺構名 層位	法量 (cm) (g)	胎土	焼成	色調	成形・調整・手法
46	弥生土器 台付鉢	A23ⅠK 33−0X 第Ⅱ層	底径 5.9 残存高 4.6	約1～2㎜大の灰色の砂粒を多く含む。 クサリ礫を多く含む。	中	外面：黄色 (2.5Y8/6) 断面：橙色 (2.5YR7/6) 内面：黄色 (2.5Y8/6)	外面 調整不明 内面 ナデ調整
47	弥生土器 台付鉢	A23ⅠK 33−0X 第Ⅱ層	底径 9.2 残存高 7.3	約1～5㎜大の灰白色・褐色の砂粒を多く含む。	中	外面：淡黄色 (2.5Y8/4) 断面：明黄褐色 (10YR7/6) 内面：淡黄色 (2.5Y8/3)	脚部外面 タテ方向のナデ調整 脚部内面 ナデ調整 杯部底部内面 調整不明
48	弥生土器 壺	A23JK 33−0X 第Ⅱ層	口径 18.2 残存高 3.0	約1㎜未満の砂粒をわずかに含む。	硬	外面： 断面： 内面： 橙色 (5YR7/6)	内・外面 ナデ調整 口縁部に直径 0.7～0.8㎝の円形浮文
49	弥生土器 壺	A23JK 33−0X 第Ⅱ層	口径 18.8 残存高 10.8	約2㎜大の砂粒を多く含む。	硬	外面： 断面： 内面： 橙色 (5YR7/6)	外面頸部 3本／㎝のヘラミガキ調整 外面肩部 ハケ状工具使用 口縁部内外面 ヨコナデ調整 内面頸部 ナデ調整
50	弥生土器 壺	A23JK 33−0X 第Ⅱ層	底径 7.5 残存高 9.2	約2㎜大の砂粒を多く含む。	硬	外面： 断面： 内面： 橙色 (5YR7/6)	外面胴部大半 4～5本／㎝のヘラミガキ調整 底部 ナデ調整 内底面に一次調整時のハケ状工具の木口の圧痕残る
51	弥生土器 壺	A23JK 33−0X 第Ⅱ層	底径 7.3 残存高 6.7	約1～5㎜大の灰色・褐色の砂粒を多く含む。 クサリ礫をわずかに含む。	硬	外面：淡黄色 (2.5Y8/4) 断面：淡黄色 (5Y8/3) 内面：浅黄橙 (7.5YR8/4)	内・外面 ナデ調整
52	弥生土器 壺	A23JK 33−0X 第Ⅱ層	底径 5.2 残存高 2.7	約1～4㎜大の白色・褐色の砂粒を多く含む。 クサリ礫を多く含む。	硬	外面：にぶい橙色 (5YR6/4) 断面：浅黄色 (7.5YR8/4) 内面：橙色 (5YR7/6)	外面 未調整 指頭痕残る 底部 ナデているが凹凸残る 内面 ナデ調整
53	弥生土器 壺	A23JK 33−0X 第Ⅱ層	底径 4.5 残存高 3.7	約1㎜大の灰色褐色の砂粒を多く含む。	硬	外面：橙色 (7.5YR7/6) 断面：灰白色 (10YR8/2) 内面：にぶい橙色 (5YR7/4)	内・外面 ナデ調整
54	弥生土器 壺	A23JK 33−0X 第Ⅱ層	底径 8.7 残存高 3.0	約1～2㎜大の褐色の砂粒をわずかに含む。	硬	外面：にぶい橙色 (7.5YR7/3) 断面：褐灰色 (10YR6/1) 内面：淡黄色 (2.5Y8/3)	外面 ナデ調整 底部 未調整 内面 10～12本／㎝のハケ調整
55	弥生土器 壺	A23ⅠK 33−0X 第Ⅱ層	底径 7.1 残存高 3.5	約1㎜大の灰黒色・褐色の砂粒を多く含む。	硬	外面：浅黄橙色 (10YR8/3) 断面：灰白色 (10YR7/1) 内面：褐灰色 (5YR4/1)	外面 ナデ調整 内面 一次調整 約10～12本／㎝のハケ調整 二次調整 ナデ調整
56	弥生土器 壺	A23JK 33−0X 第Ⅱ層	底径 5.4 残存高 4.5	約1㎜未満の砂粒をわずかに含む。 クサリ礫をわずかに含む。	硬	外面：にぶい橙色 (7.5YR7/4) 断面：にぶい橙色 (7.5YR7/4) 内面：褐灰色 (10YR5/1)	外面 一次調整 4～5本／㎝のヘラミガキ調整 二次調整 ナデ調整 底部外面 一次調整 板状工具による調整 二次調整 ナデ調整 内面 ナデ調整

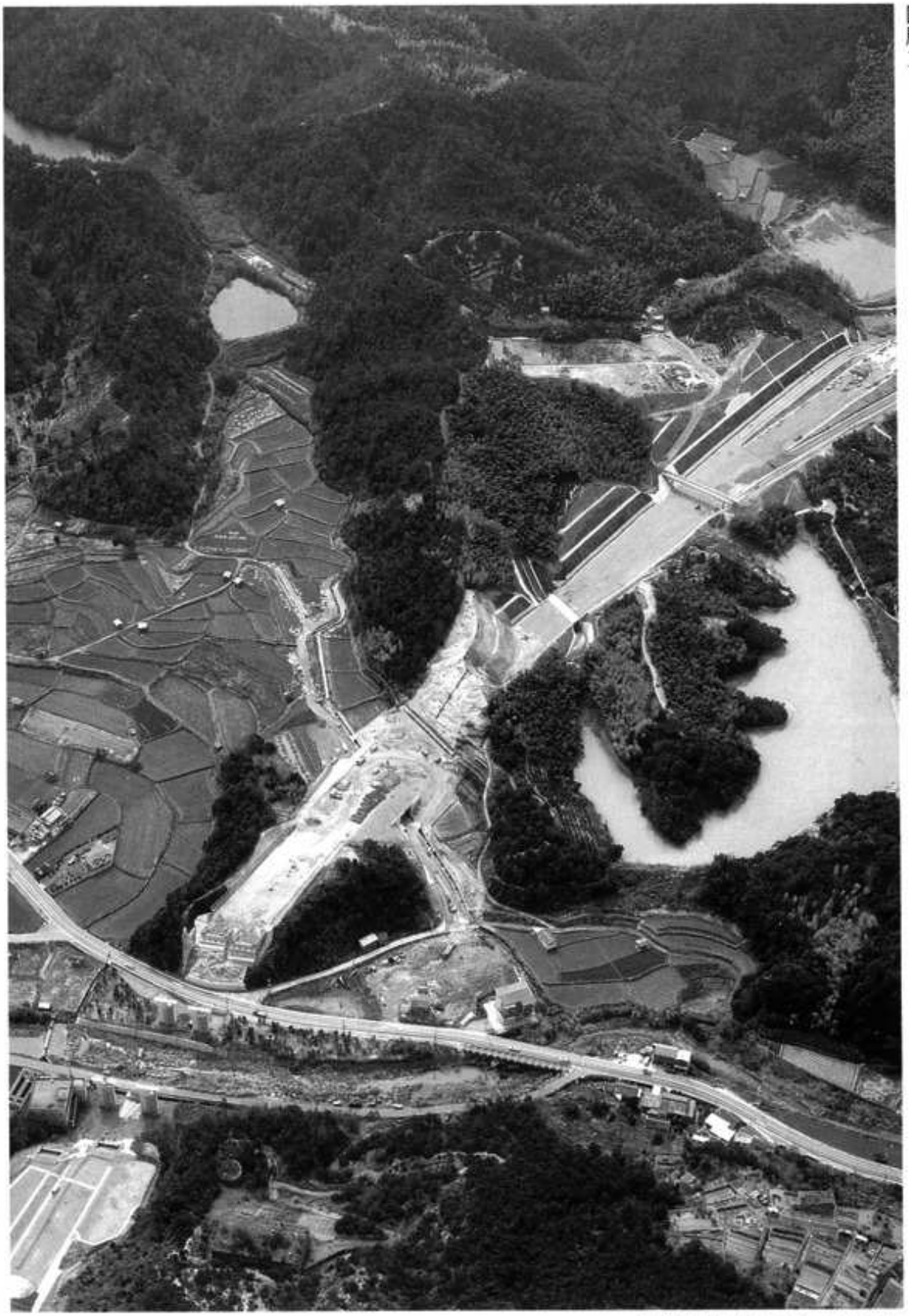
番号	種類	出土地点 遺構名 層位	法量 (cm)　(g)	胎土	焼成	色調	成形・調整・手法
57	弥生土器 壺	A23JK 33−0X 第II層	底径　8.0 残存高　3.7	約1〜3mm大の灰色・褐色の砂粒をわずかに含む。 クサリ礫をわずかに含む。	硬	外面：淡黄色 (10YR8/3) 断面：淡黄色 (2.5Y8/3) 内面：にぶい橙色 (7.5YR7/3)	外面　3〜4本／cmのヘラミガキ調整 底部　ナデ調整 内面　一次調整　7〜8本／cmのハケ調整 二次調整　ナデ調整
58	弥生土器 蓋	A23JK 33−0X 第II層	蓋径　12.0 残存高　1.9	約1mm未満の白色砂粒をわずかに含む。	硬	外面：浅黄橙色 (10YR8/4) 断面：橙色 (5YR7/6) 内面：浅黄橙色 (10YR8/4)	内・外面　ナデ調整
59	弥生土器 壺	A23JK 33−0X 第II層	口径　14.7 残存高　7.5	約1mm大の灰褐色の砂粒をわずかに含む。 クサリ礫わずかに含む。	中	外面：淡黄色 (2.5Y8/4) 断面：オリーブ灰色 (5GY5/1) 内面：にぶい黄橙色 (10YR7/4)	外面　3本／cmの平行タタキ目 口縁部　内外面　ヨコナデ調整 内面　一次調整　ハケないし板状工具によるナデ調整 二次調整　ナデ調整
60	弥生土器 壺	A23KK 33−0X 第II層	口径　12.3 残存高　6.8	約1mm大の灰黒色・灰褐色の砂粒を多く含む。 約5mm大の結晶片岩をわずかに含む。	硬	外面：にぶい黄橙色 (10YR6/4) 断面：にぶい黄橙色 (10YR6/4) 内面：灰黄褐色 (10YR6/2)	外面　調整不明 胎部内面　ヘラケズリ調整
61	弥生土器 甕	A23JK 33−0X 第II層	底径　6.8 残存高　10.1	約1〜3mm大の灰色・褐色の砂粒を多く含む。	硬	外面：橙色 (5YR7/6) 断面：橙色 (5YR7/6) 内面：浅黄橙色 (10YR8/6)	外面　3本／cmの平行タタキ目 内面　ナデ調整
62	弥生土器 甕	A23JK 33−0X 第II層	底径　4.4 残存高　3.0	約1mm大の黒色の砂粒をわずかに含む。	硬	外面：にぶい橙色 (7.5YR7/3) 断面：淡橙色 (5YR8/4) 内面：にぶい橙色 (7.5YR7/4)	外面　2〜3本／cmの平行タタキ目 底部周縁部にナデ調整 内面　ナデ調整
63	弥生土器 壺	A23JK 33−0X 第II層	底径　5.5 残存高　4.2	約1大の白色の砂粒をわずかに含む。 約4mm大の結晶片岩をわずかに含む。	中	外面：明赤褐色 (5YR5/8) 断面：褐色 (7.5YR4/6) 内面：橙色 (5YR6/6)	外面　2〜3本／cmの平行タタキ目 底部　ナデ調整 内面　調整不明
64	弥生土器 壺	A23JK 33−0X 第II層	底径　7.2 残存高　5.4	約1mm大の褐色の砂粒を多く含む。 クサリ礫多く含む。	硬	外面：にぶい橙色 (5YR6/4) 断面：褐灰色 (5YR5/1) 内面：にぶい橙色 (7.5YR7/4)	外面　3本／cmの平行タタキ目 底部　ナデ調整　指頭痕残る 内面　一次調整　8〜10本／cmのハケ調整 二次調整　ナデ調整
65	弥生土器 壺	A23JK 33−0X 第II層	底径　5.2 残存高　4.8	約1mm大の褐色の砂粒をわずかに含む。	中	外面：灰黄褐色 (10YR5/2) 断面：褐灰色 (10YR6/1) 内面：明黄褐色 (10YR6/6)	外面　ヘラケズリ調整 外面下部　ナデ調整 底部　ナデ調整 内面　ナデ調整
66	弥生土器 壺	A23JK 33−0X 第II層	――	約1〜3mm大の角閃石・石英粒子を多く含む。	中	外面： 断面： 内面： にぶい黄褐色 (10YR4/3)	外面　4本／cmのヘラミガキ調整 内面　調整不明
67	平瓦	A23AH 7−05 下層	器長　9.2 器幅　7.4 器厚　2.2	約1mm大の砂粒を多く含む。 クサリ礫多く含む。	中	外面：黒色 (N2/0) 断面：灰白色 (5Y8/2) 内面：黒色 (N2/0)	内・外面にはなれ砂

図　　版



調査前の状況（南から）右が「ナメクジ山」

同上（「ナメクジ山」側から）



遺跡遠景（空中写真・北東から）

調査区全景（空中写真・北から）

図版四　調査区全景（垂直写真・右が北）

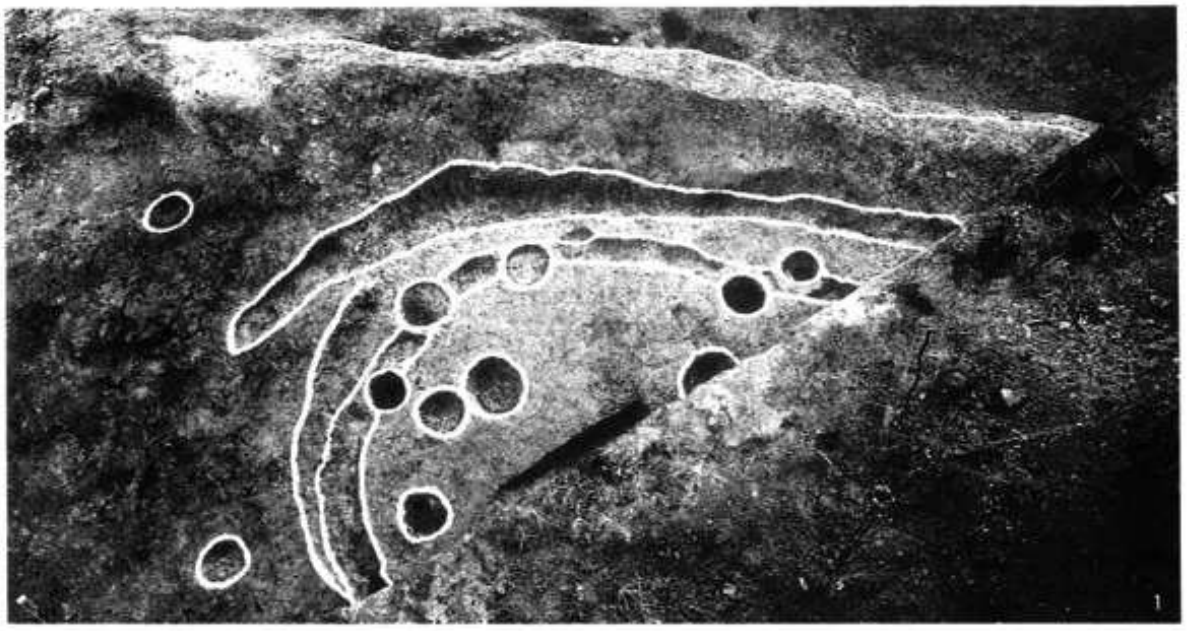
図版五　調査区全景（東側「ナメクジ山」から）

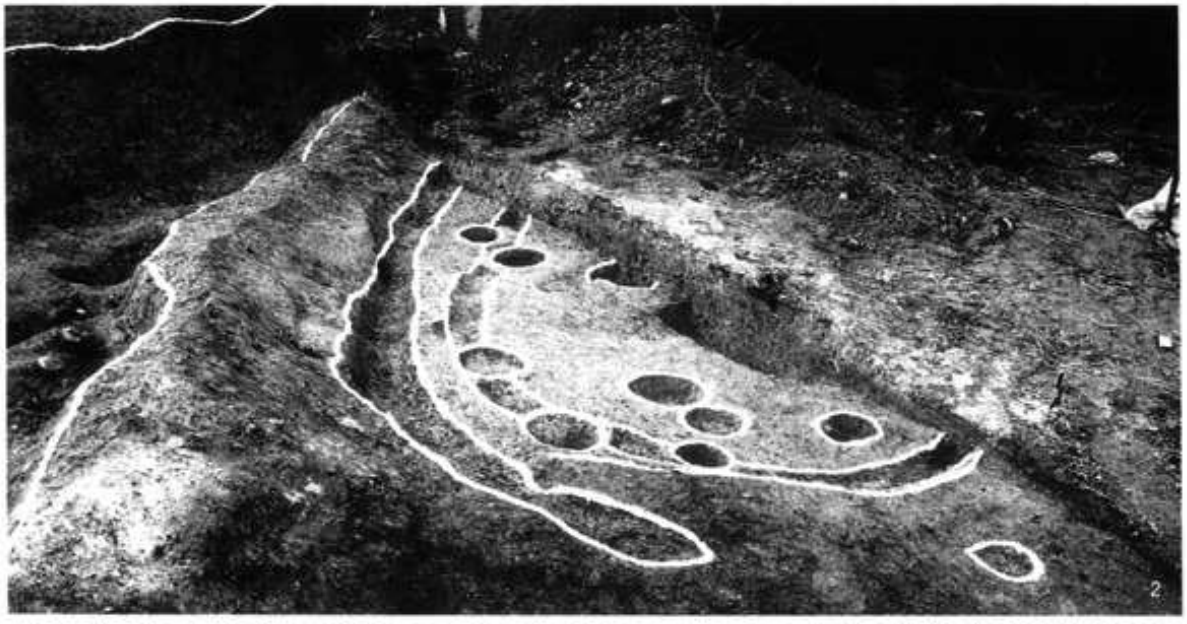
1．南東壁土層　2．F－F′土層　3．A－A′下部の土層
4．G－G′土層　5．B－1土層

図版七

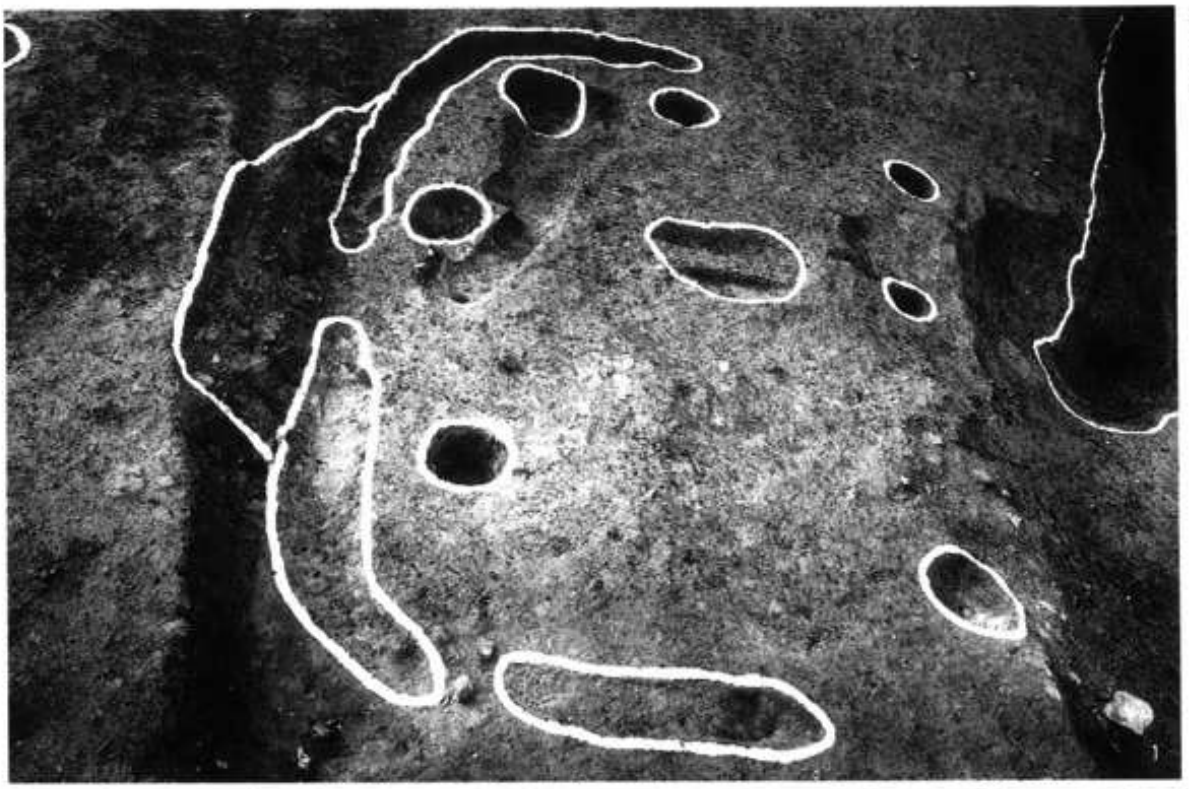
北部竪穴住居群（北から）

同上（東から）



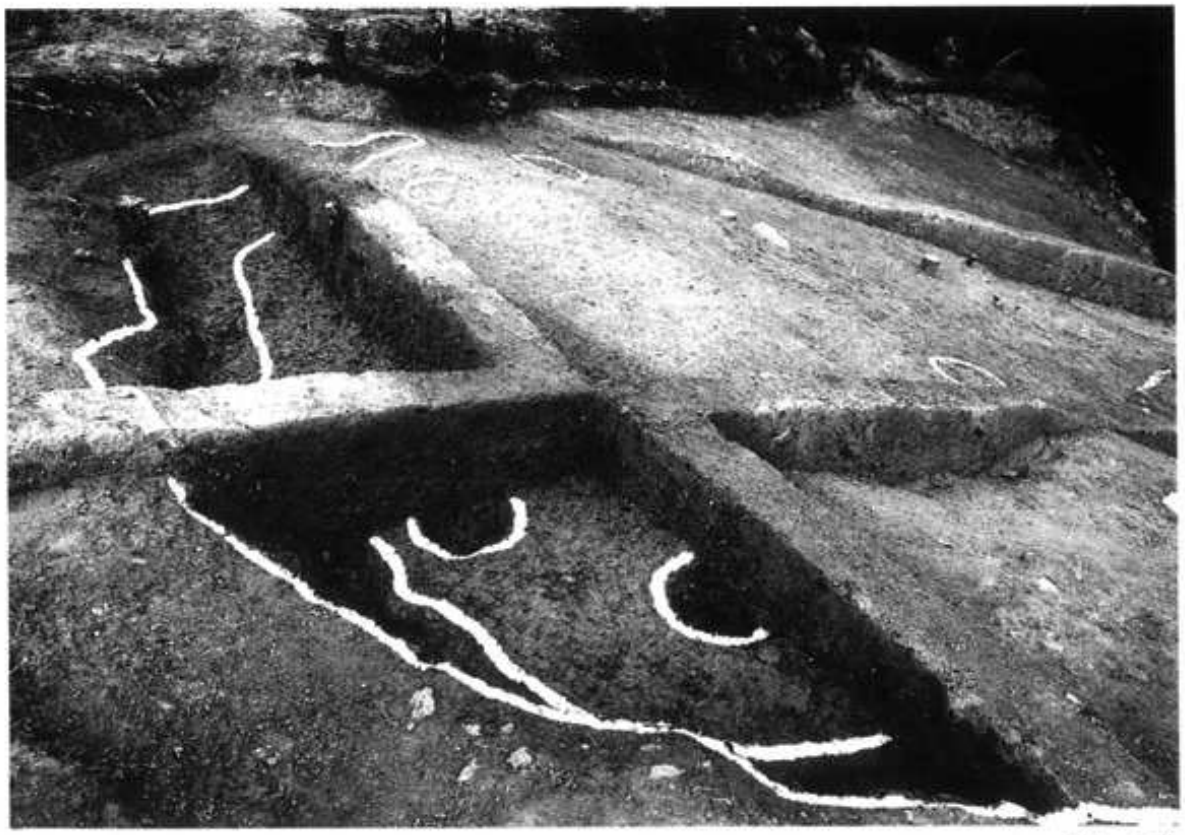


1．5a・b－OD（北から）　2．同上（南東から）　3．同上　土層



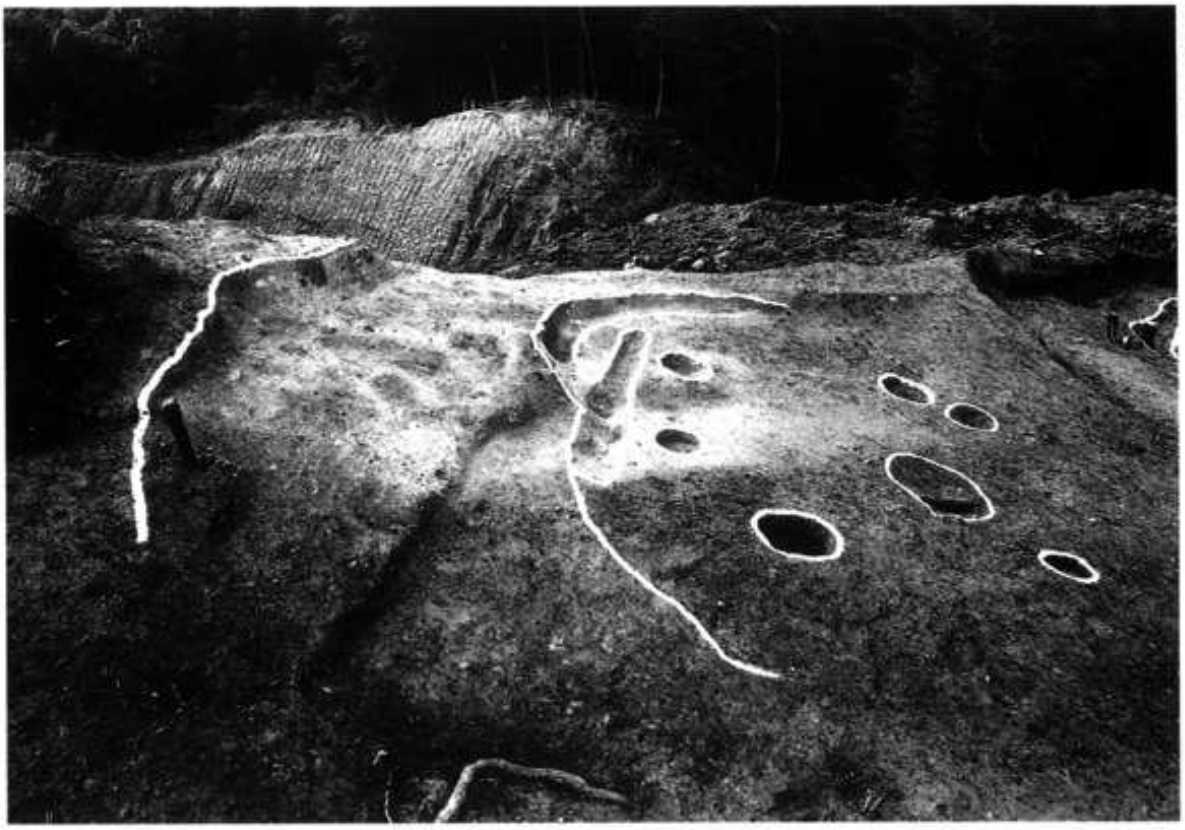
1．59－OD（東から）　2．同上　土層　3．同上　遺物出土状況

46－ＯＤ（南から）



同上　土層

図版一一

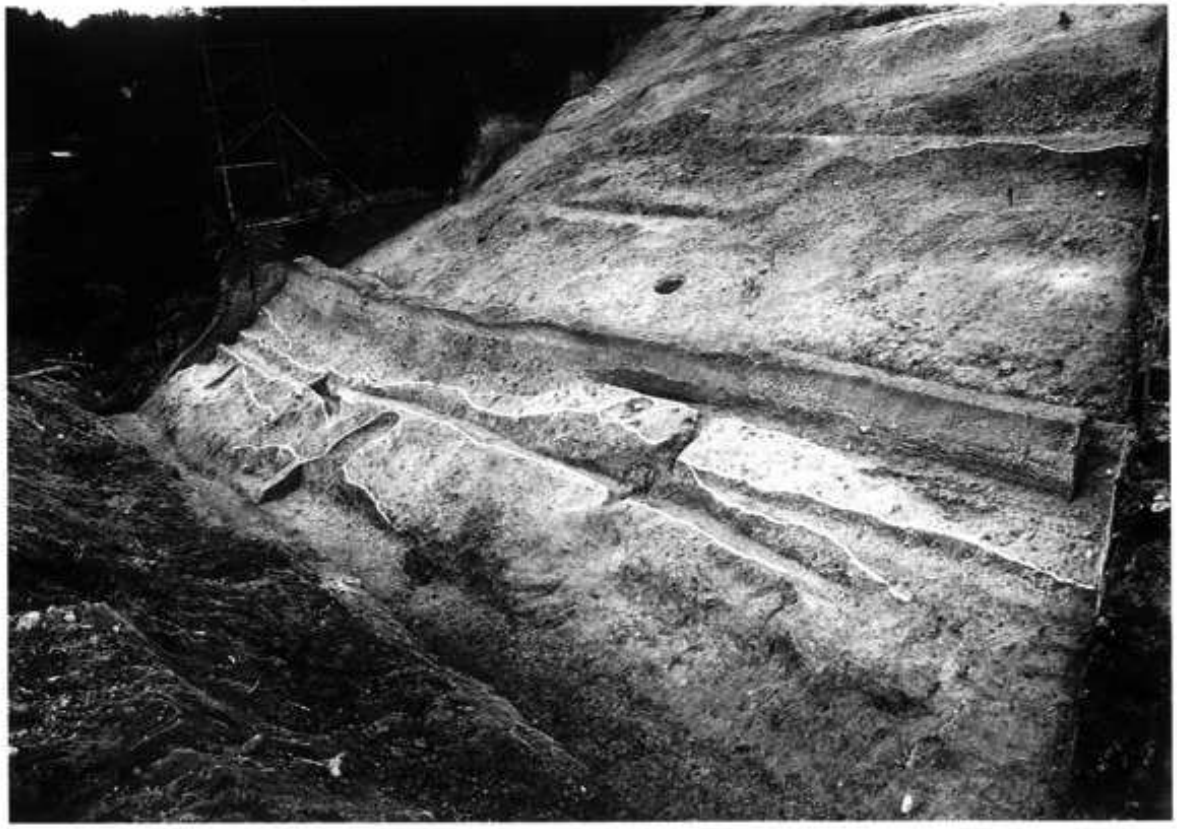


91－OD（南から）

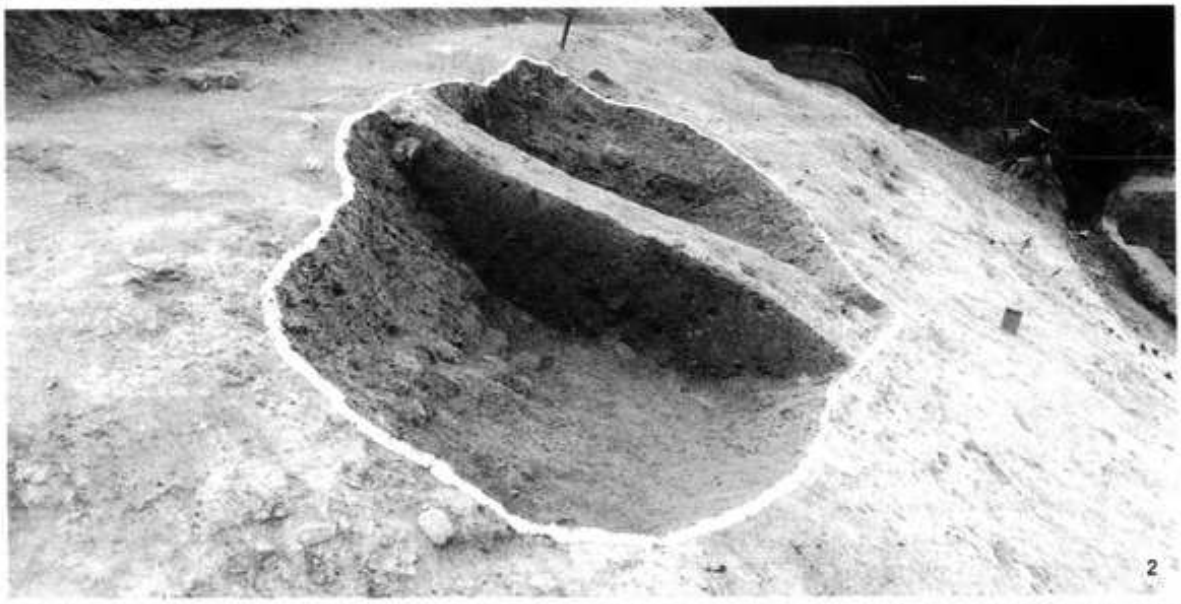
同上　土層

1．東部竪穴住居群（東から）　2．11－OD（南から）　3．47－OD（北から）

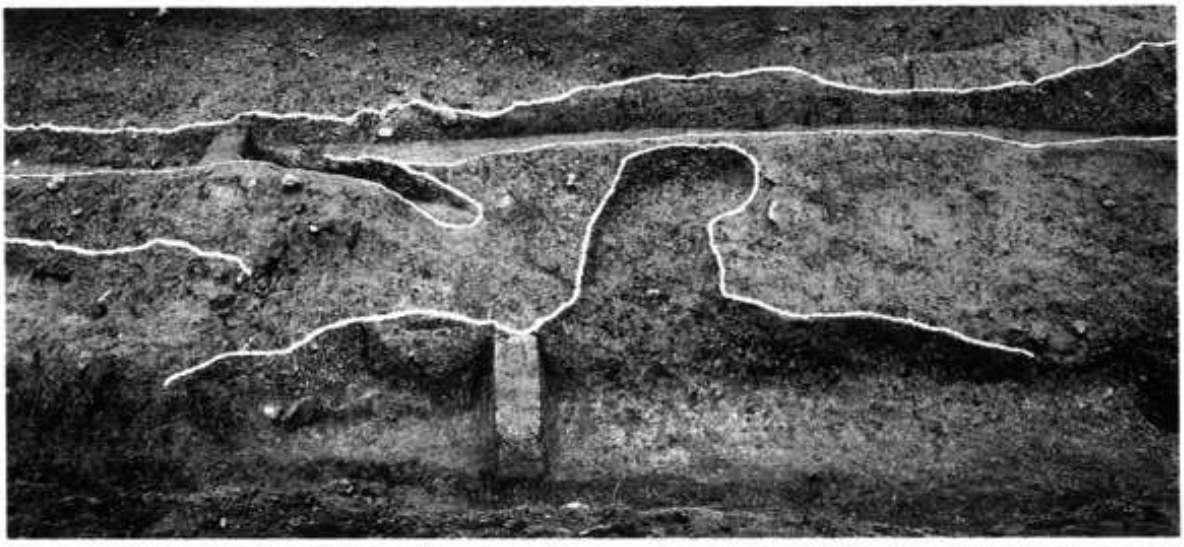
1．10−OS A−1 土層　2．10−OS C−C′・D−D′ 土層　3．7−OS 土層



同上と40－OO（北から）



1．49－OS（北から）　2．32－OO（南から）　3．34－OD（北から）
4．32－OO北方ピット群（西から）



1．43・54・57－OS土層　2．58－OX（東から）　3．40－OO土層（北から）

1．33－OX（西から）　2．同上A－2　土層　3．同上遺物出土状況（北から）

1

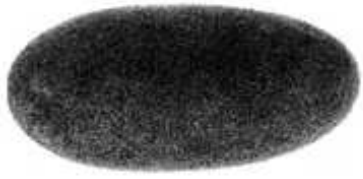
2

3

1

2

3



40

39

5

7

8

16

23

22

9

23

20

17

15

12

24

25

13

10

26

31

27

27

36

34

35

37

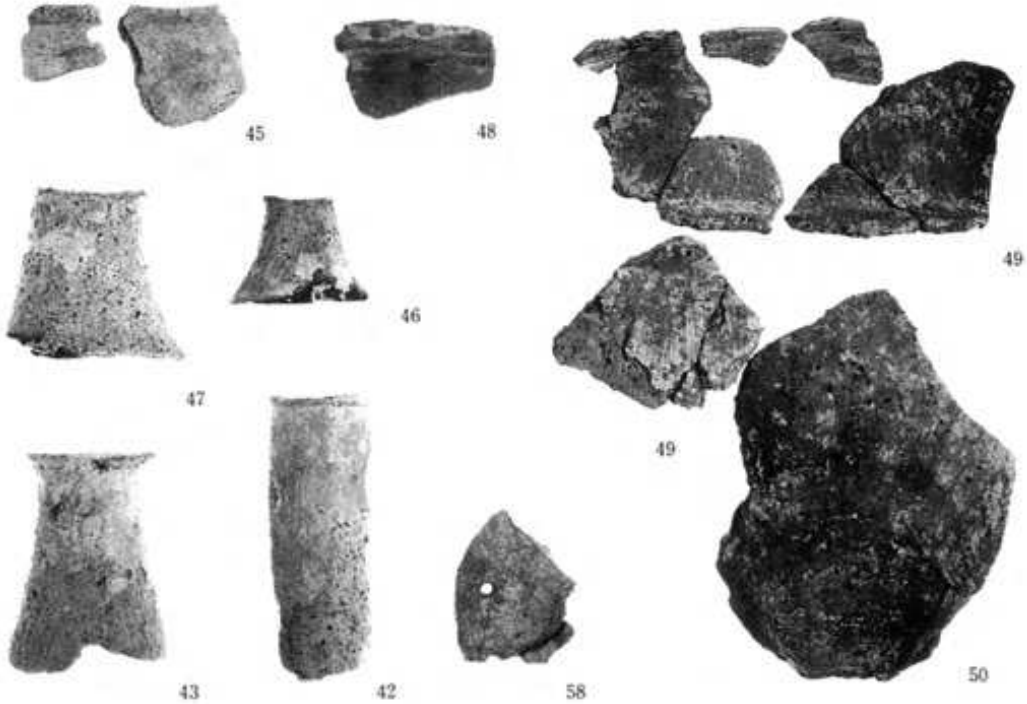
37

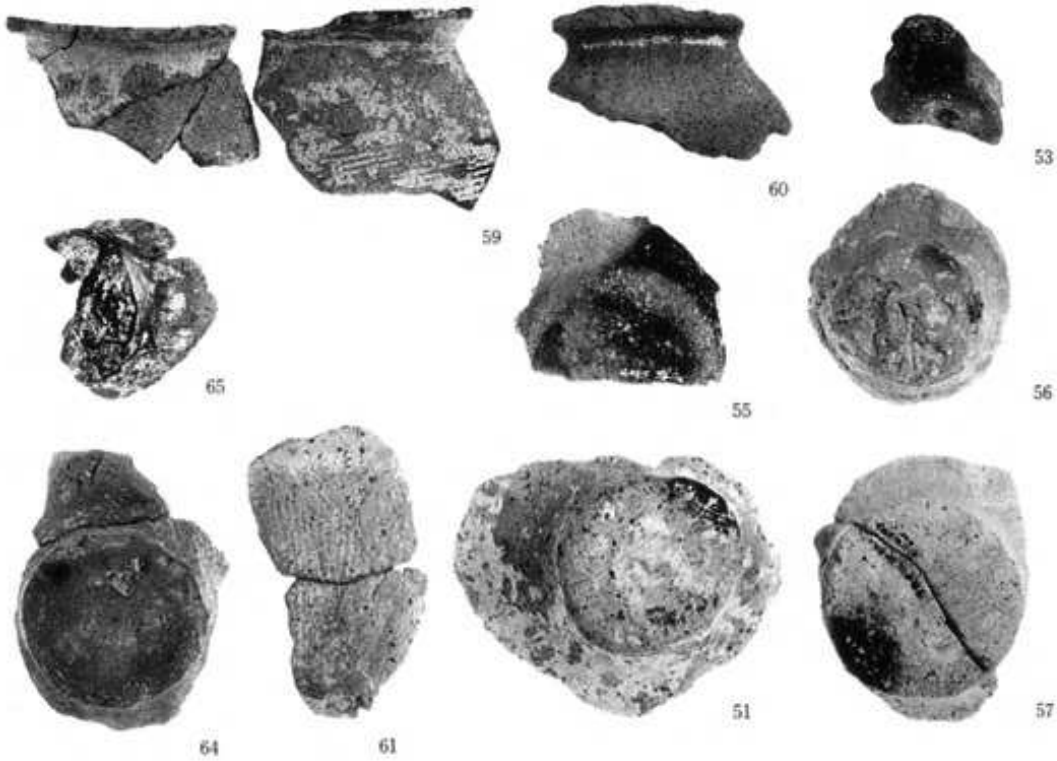
37

37

37

33


45
48
49
46
47
49
43
42
58
50

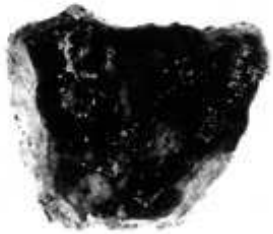

60
53
59
65
55
56
64
61
51
57

32

66

38

14



67

(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書　第35輯
近畿自動車道和歌山線建設に伴う

滑　瀬　遺　跡　II

—発掘調査報告書—

平成元年1月31日

編集・発行　財団法人　大阪府埋蔵文化財協会
大阪市東区谷町2丁目36番地大手前ウサミビル

印　　刷　株式会社　中島弘文堂印刷所